

警察官による市民接触行動の規定要因 とインパクトに関する縦断的研究

——第一波調査の基礎的報告（2・⁽²¹⁾完）——

岡	邊	健
佐	伯	彦
松	原	世
宮	澤	生

7. 第一波第2段階調査の基礎的分析（警察に対する態度）

「広義の被職質経験⁽²²⁾」がある者については、その経験の具体的な内容

(21) ここでは、岡邊ほか（2024）に続き、科学研究費補助金基盤研究（B）「警察官による市民接触行動の規定要因とインパクトに関する縦断的研究」（研究代表者：宮澤節生）の助成を受けて行われた調査研究のうち第一波調査の基礎的な集計結果を報告するが、科研費の課題番号は、2024年度から23K20649に変更となった。

なお、調査結果の分析は、研究会のメンバー（本稿の著者）全員で検討しながら進めたが、本稿のうち7から9-3は主として佐伯が、9-4から9-6と11は主として松原が、10は主として松原と佐伯が、そして12は主として宮澤が執筆した。

また、今回の調査の質問項目およびそれらに対する回答分布は、京都大学の機関レポジトリにアップロードしている報告書（岡邊健ほか（2024）『警察官による市民接触行動の規定要因とインパクトに関する縦断的研究 第一波第2段階調査 基礎集計表』）に掲載している（<http://hdl.handle.net/2433/289140>より入手可能である。2024年10月11日アクセス）。ただし、回答者の住所の郵便番号について尋ねたQ49については上記報告書では触れていない。このQ49は、回答者の住所の郵便番号自体を知ることが目的として尋ねられたものではなく、回答者の

等について尋ねており、その結果は、岡邊ほか（2024）において紹介した通りである。この「広義の被職質経験」に関する質問は、第一波第1段階調査でそのような経験があったと回答した者、すなわち「被職質経験あり群」に限定して尋ねられたものである。この「広義の被職質経験」に関連した質問の後、「被職質経験あり群」および「被職質経験なし群」の両方に対して共通の質問がなされている⁽²³⁾。そこにおいて、まず警察に対する一般的な態度を中心とした質問がなされている⁽²⁴⁾。なお、これらの質問群は、警察官との接触場面における市民の公正判断が、その後の市民の法遵守行動や警察への協力行動の水準に影響を与えるという手続的公正の問題関心に即して用意されたものである（岡邊ほか（2024：385）を参照）。この問題関心に即した日本における先行研究として津島昌寛と浜井浩一による研究（津島・浜井 2013；2017；Tsushima & Hamai 2015）がある⁽²⁵⁾。この研究は、ヨーロッパで行われた「Trust in Justice」調査に参加するかたちで日本において実施されたものであり、

住所を含む地域の特性について別途変数を用意したうえで、その変数と個々の回答者とを結び付けるために郵便番号の情報が必要であったために尋ねられたものである。

(22) 「広義の被職質経験」の定義については、岡邊ほか（2024：387）を参照。

(23) 「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」については、岡邊ほか（2024：388-389）を参照。

(24) ただし、この警察に対する態度に関する質問に先立って、1年ほどの間に、自宅にいるときに警察官による訪問を受けた経験の有無、自動車やバイクを運転中に警察官により停止を求められた経験の有無が尋ねられており、それぞれについて経験があると答えた場合には、その経験に関していくつかの質問がなされている。しかし、これらの質問に対する回答の分布については、紙幅の関係上ここでは省略する。それらについては、注21に記した機関レポジトリにアップロードしている報告書のうち、Q16からQ33の部分参照されたい。

(25) 中学生を対象とした非行の自己申告調査に基づいて手続的公正の問題意識に即した分析を行うものとして、ISRD-JAPAN 実行委員会（2024：第10章）が、本調査実施後に刊行された。

その調査票は、「Trust in Justice」調査のものを日本語訳したものである（浜井・津島 2012：134-135）。第一波第2段階調査における警察の態度等に関する質問群は、この先行研究における調査（調査名は「犯罪被害などに関する調査」であるが、以下では単に「先行調査」と呼ぶ）⁽²⁶⁾が用いた調査票を参考としたものである。したがって、以下の警察に対する態度等の調査項目は「先行調査」と基本的に同じであるが、「先行調査」は、15歳以上の男女を対象に、住民基本台帳をもとに層化二段無作為抽出法を用いてサンプリングを行っているのに対して（津島・浜井 2011；浜井・津島 2012：135；Tsushima & Hamai 2015：216-217）、本調査は、調査会社に登録されたモニターを対象に、20代から60代の男性に限って調査を実施しており、サンプリングの枠組みが大きく異なる。また、注26において言及したように、「わからない」の選択肢の有無という点でも、「先行調査」と本調査とでは大きく異なっている。加えて、「先行調査」は、その分析結果がすでに報告されているが（津島・浜井（2013：2017）やTsushima & Hamai（2015）を参照）、各質問項目の

(26) 調査票作成時に、津島昌寛教授（龍谷大学）から調査票の提供、および補足的な説明をいただいた。この場をお借りして御礼を申し上げる。この後すぐに紹介する警察に対する態度に関する質問項目（Q34～Q39）および、その後で紹介する「逸脱行動に対する評価やライフスタイル」のうち逮捕される可能性の見積もり（Q40）を作成するにあたって、若干修正を加えた部分もあるが、「先行調査」の調査票を参考にさせていただいた。なお、「先行調査」と本調査の大きな違いとして、「先行調査」では「わからない」という選択肢が用意されていたが、本調査ではそのような選択肢は設けていない（ただし、警察に従う義務感を測定したQ35では、「わからない」の選択肢は維持している）。「先行調査」では、警察への態度に関して「わからない」に回答が多く集まった結果、それらの欠損値を一定の方法で処理したうえで分析する必要があった（Tsushima & Hamai 2015：219）。本調査では、そのこと自体の適否を論じる余地はあるものの、多くの質問項目において「わからない」の選択肢を設けなかったため、欠損値の問題をある程度緩和することができた。

度数分布等について網羅的に基礎的な集計結果を報告しているものは、研究会のメンバーが把握する限りでは公表されたものを見つけれなかった。そのため、本調査の回答分布と「先行調査」の回答分布の比較は基本的には行っていない。

7-1. 警察の公正への信頼

Q34において、警察が公正であることに対する人びとの信頼の程度が尋ねられている。すなわち、「警察は人びとに対して敬意を払っている」、「警察は事件を偏見なく公平に処理している」、「警察は、自らの処分や措置について説明を求められると、しっかり応じている」の3項目について、自身の意見としてどの程度あてはまるかを「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの4件法により尋ねている。その結果は表16の通りである。なお、岡邊ほか（2024：401-403）で説明した通り、ウェイトバックをした後の結果もあわせて表示している（以下⁽²⁷⁾

(27) ただし、岡邊ほか（2024：401-403）で示したウェイトの値により重み付けをすると、実際の回収数よりも全体の数が大きくなってしまう。本来的には、回収数と同じサイズに割り戻すようにウェイトを設定する必要がある。そのように調整されたウェイトは、東京23区の20代が3.40、東京23区の30代が1.55、東京23区の40代が0.90、東京23区の50代が0.67、東京23区の60代が0.62、政令市の20代が2.83、政令市の30代が1.15、政令市の40代が0.72、政令市の50代が0.60、政令市の60代が0.62、主要中核市の20代が2.98、主要中核市の30代が1.16、主要中核市の40代が0.67、主要中核市の50代が0.59、主要中核市の60代が0.58である（小数第3位を四捨五入）。以下におけるウェイトバックは、この値をもとに行われている。

なお、岡邊ほか（2024：401-403）で示したウェイトでも、以上で示したウェイトでも、いずれを用いてもウェイトバック後の回答分布の%に違いはない。したがって、岡邊ほか（2024）で報告した内容に瑕疵はない。また、以下で紹介する集計では統計的な検定を加えている部分もあるが、ウェイトバック後については、あくまで参考値としてその集計結果を示すことがあるが、統計的検定は行っていない。

表16 警察の公正に対する信頼

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
警察は人びとに対して敬意を払っている			
とてもあてはまる	7.0	(766)	7.9
ある程度あてはまる	46.2	(5,070)	45.4
あまりあてはまらない	32.6	(3,574)	32.1
まったくあてはまらない	14.2	(1,556)	14.5
合計	100.0	(10,966)	100.0
警察は事件を偏見なく公平に処理している			
とてもあてはまる	6.3	(694)	7.3
ある程度あてはまる	44.1	(4,840)	43.4
あまりあてはまらない	33.9	(3,722)	33.6
まったくあてはまらない	15.6	(1,710)	15.6
合計	100.0	(10,966)	100.0
警察は、自らの処分や措置について説明を求められると、しっかり応じている			
とてもあてはまる	8.0	(880)	9.4
ある程度あてはまる	46.3	(5,082)	46.2
あまりあてはまらない	31.5	(3,455)	30.8
まったくあてはまらない	14.1	(1,549)	13.7
合計	100.0	(10,966)	100.0

の集計においても、この点は同様に妥当する)。警察の公正さへの信頼については、やや肯定的な意見が多いものの、その差は僅かであり、評価は拮抗している。

ここで、この警察の公正さに関する信頼の程度が、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」とで異なっているかどうかをみるために、クロス集計を行い、独立性の検定を行った(表17)。なお、警察官との接触経験がどのような内容を有しているかは、個々の接触経験ごとに様々である。したがって、接触経験と警察に対する態度等の関連については、接触経験の内容がどのようなものであったかという点も踏まえて分析をする必要がある。そのような作業は今後の課題であるが、この基

研究ノート

表17 群ごとの警察の公正に対する信頼

警察は人びとに対して敬意を払っている					
(ウェイトバック前)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群 (n = 5, 483)	行%	7.1%	41.2%	33.2%	18.5%
	調整済み残差	0.60	-10.65	1.39	12.92
被職質経験なし群 (n = 5, 483)	行%	6.8%	51.3%	32.0%	9.9%
	調整済み残差	-0.60	10.65	-1.39	-12.92
$\chi^2_{(3)} = 205.779, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.137$					
(ウェイトバック後)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群	行%	8.4%	39.3%	33.1%	19.2%
	調整済み残差	1.59	-12.91	2.23	14.07
被職質経験なし群	行%	7.5%	51.5%	31.2%	9.8%
	調整済み残差	-1.59	12.91	-2.23	-14.07
警察は事件を偏見なく公平に処理している					
(ウェイトバック前)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群 (n = 5, 483)	行%	7.5%	40.1%	33.4%	19.0%
	調整済み残差	4.86	-8.42	-1.21	9.84
被職質経験なし群 (n = 5, 483)	行%	5.2%	48.1%	34.5%	12.2%
	調整済み残差	-4.86	8.42	1.21	-9.84
$\chi^2_{(3)} = 144.559, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.115$					
(ウェイトバック後)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群	行%	8.7%	39.2%	33.2%	18.9%
	調整済み残差	5.68	-8.96	-0.91	9.33
被職質経験なし群	行%	5.9%	47.7%	34.0%	12.4%
	調整済み残差	-5.68	8.96	0.91	-9.33
警察は、自らの処分や措置について説明を求められると、しっかり応じている					
(ウェイトバック前)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群 (n = 5, 483)	行%	9.2%	43.7%	30.0%	17.1%
	調整済み残差	4.64	-5.59	-3.31	8.80
被職質経験なし群 (n = 5, 483)	行%	6.8%	49.0%	33.0%	11.2%
	調整済み残差	-4.64	5.59	3.31	-8.80
$\chi^2_{(3)} = 110.601, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.100$					
(ウェイトバック後)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群	行%	11.0%	43.2%	29.5%	16.3%
	調整済み残差	5.77	-6.31	-2.74	7.94
被職質経験なし群	行%	7.8%	49.2%	32.0%	11.1%
	調整済み残差	-5.77	6.31	2.74	-7.94

礎的な集計においては、大まかに「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」との間に、警察の捉え方に違いがあるか、あるとしてその違いはどのようなものであるかを確認するにとどめる。

いずれの項目においても、「被職質経験あり群」の方が、「被職質経験なし群」に比して、「とてもあてはまる」と「まったくあてはまらない」の両方の回答割合が多い。実際に職質を受ける経験をすることで警察に対するイメージが明確になり、肯定の方向であれ否定の方向であれ、より明確な回答ができるようになったものと思われる⁽²⁸⁾。また、中間的な回答である「ある程度あてはまる」と「あまりあてはまらない」についていえば、「被職質経験なし群」に比して「被職質経験あり群」において前者の割合が特に小さくなっている。結果的に「被職質経験あり群」では、「被職質経験なし群」と比較して、いずれの項目についても肯定的な回答割合が減っている。このように、職質を受ける経験をした者は、そうでない者と比べて、警察の公正さについてより明確なイメージを有しており、かつ、本サンプルにおいては、職質の経験を有する者において、警察の公正さについてやや否定的なイメージを有する者が多いようである。ただし、このことから、職務質問を通した警察との接触は、一般的に市民に対して否定的な印象を与えることが多いと結論付けることはできない。本調査の設計上、第1段階調査において広義の被職質経験ありと回答した者のうち、特に警察の対応に不満を抱いていた者の方が相対的に多く第2段階調査において回答した可能性も否定できない。「被職質経験あり群」において、その職質における具体的な経験内容が、

(28) 「先行調査」では、サンプル中で警察との接触経験のある者の比率が低かったため、警察に対する印象は尺度の中間に集中しがちであった可能性が指摘されている (Tsushima & Hamai 2015: 222-223)。それに対して、本調査の「被職質経験あり群」は、少なくとも過去1年の間に警察との接触を経験している者に限られているため、警察に対する印象が明確である者が多かったと考えられる。

これらの警察に関する評価とどのように関連しているかは、さらに詳細な検討を要するものの、現時点では、職務質問を受けることで、警察の公正に対する信頼の程度は、肯定・否定いずれの方向についても強くなり、また、少なくとも本サンプル中では職務質問を受けた者において、やや否定的な意見を有する者が多いようであることを指摘するにとどめておく。なお、各項目につき肯定的な意見（「とてもあてはまる」と「ある程度あてはまる」）の割合をみると、「警察は人びとに対して敬意を払っている」は、「被職質経験あり群」で48.3%、「被職質経験なし群」で58.1%（ウェイトバック後は前者が47.6%で後者が59.1%）、「警察は事件を偏見なく公平に処理している」は、「被職質経験あり群」で47.6%、「被職質経験なし群」で53.3%（ウェイトバック後は前者が47.9%で後者が53.6%）、そして「警察は、自らの処分や措置について説明を求められると、しっかり応じている」は、「被職質経験あり群」で52.9%、「被職質経験なし群」で55.8%（ウェイトバック後は前者が54.2%⁽²⁹⁾で後者が57.0%）であった。

(29) 「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」との間における肯定的な回答割合の差は、いずれの項目についても統計的に有意であった。「警察は人びとに対して敬意を払っている」「警察は事件を偏見なく公平に処理している」「警察は、自らの処分や措置について説明を求められると、しっかり応じている」の項目の順に、 $\chi^2_{(1)} = 106.808, p < 0.001$, Cramer's $V = 0.099$, $\chi^2_{(1)} = 35.967, p < 0.001$, Cramer's $V = 0.057$, $\chi^2_{(1)} = 9.410, p = 0.002$, Cramer's $V = 0.029$ であった。

7-2. 警察の命令に従う義務

Q35において、警察の命令に従う義務感について尋ねられている。すなわち、必ずしも警察の命令に納得できない場面においても、なお警察の命令に従うべきかどうかを、そのような「義務はない」を0とし、そのような「義務がある」を10としたスケールに基づき答えてもらっている。なお、いずれの項目においても「わからない」の選択肢が用意されている。まず、回答の分布をみると、表18の通りである。いずれの項目においても、少数ながら「わからない」という回答があるほかは、「義務はない (= 0)」とスケールの中間あたりに回答が集中しており、やや義務はないという方向に分布が偏っている。図9にある通り、「わからない」を欠損値として、0から10までの回答についてその累積%をみると、0「義務はない」を選んでいる者が20%前後おり、スケールの中間である5の段階で累積%は75%を超えている。また、図9におけるグラフの形状がいずれの項目においても類似していることから推測されるように、これら3項目間の相関係数は概して高い(表19)。自分の意に反する命令にまで従う義務を感じている者は多くなく、警察の指示⁽³⁰⁾に対しても、その正当な理由や公正さを要求する者が多いことが分かる。

(30) 「先行調査」では、3項目のうち「理由が分からなかったり、その理由に同意していなくても、警察の言うことにしたがうこと」を取り出し、他国における回答傾向との比較が行われている。発表媒体によって報告されている数値に違いがあるように見えるが、結論として、理由に同意できないような場合に警察の指示に従うべきであるとの感覚は、国際的にみて日本は低い水準にあることが指摘されている(佐藤(2013: 20-23)や浜井・津島(2012: 135-136)を参照)。

研究ノート

表18 警察の命令に従う義務

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
自分の意見と異なっても、警察の決定を支持すること			
0 = 義務はない	17.7	(1,942)	16.5
1	3.5	(386)	3.7
2	6.4	(705)	6.8
3	10.3	(1,129)	10.3
4	8.8	(970)	9.3
5	25.6	(2,808)	24.5
6	8.8	(966)	9.4
7	6.5	(709)	7.0
8	4.4	(478)	4.4
9	1.2	(127)	1.4
10 = 義務がある	2.7	(293)	2.7
わからない	4.1	(453)	4.0
合計	100.0	(10,966)	100.0
理由が分からなかったり、その理由に同意していなくても、警察の言うことにしたがうこと			
0 = 義務はない	21.3	(2,340)	19.7
1	5.0	(547)	5.2
2	7.8	(858)	7.9
3	12.4	(1,364)	12.6
4	9.8	(1,077)	10.1
5	21.2	(2,324)	20.6
6	7.8	(854)	8.5
7	5.1	(563)	5.6
8	3.0	(329)	3.4
9	1.1	(117)	1.2
10 = 義務がある	2.1	(230)	2.1
わからない	3.3	(363)	3.2
合計	100.0	(10,966)	100.0
警察の対応が気に入らなくても、警察の言うことにしたがうこと			
0 = 義務はない	18.5	(2,031)	17.0
1	4.8	(527)	5.1
2	6.9	(761)	6.8
3	10.6	(1,159)	10.3
4	9.7	(1,064)	10.3
5	22.8	(2,504)	22.0
6	9.6	(1,057)	10.2
7	6.2	(681)	7.0
8	3.5	(389)	4.0
9	1.3	(146)	1.6
10 = 義務がある	2.6	(289)	2.6
わからない	3.3	(358)	3.1
合計	100.0	(10,966)	100.0

警察官による市民接触行動の規定要因とインパクトに関する縦断的研究

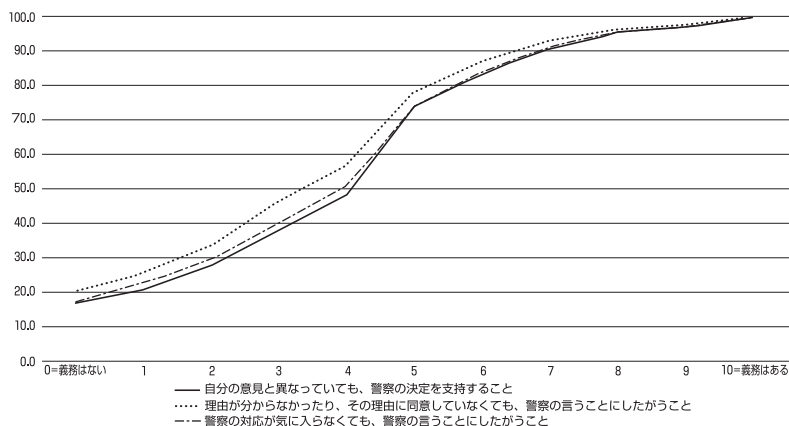


図9 警察の命令に従う義務の累積%（ウェイトバック前）

表19 警察の命令に従う義務の項目間の相関

(ウェイトバック前)	理由が分からなかったり、その理由に同意していなくても、警察の言うことにしたがうこと	
	自分の意見と異なっているにもかかわらず、警察の決定を支持すること	警察の対応が気に入らなくても、警察の言うことにしたがうこと
自分の意見と異なっているにもかかわらず、警察の決定を支持すること	0.785 ***	0.747 ***
理由が分からなかったり、その理由に同意していなくても、警察の言うことにしたがうこと		0.814 ***

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

ここで、この警察の命令に従う義務感が、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」とで異なっているかどうかをみるために、クロス集計を行い、独立性の検定を行った（表20）。概して、「わからない」の回答割合が「被職質経験あり群」でやや少ないのは、⁽³¹⁾7-1で述べたと

(31) ウェイトバック前の集計に基づいて残差分析をすると、「警察の対応が気に入らなくても、警察の言うことにしたがうこと」のみ、「わからない」の回答割合が、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」との間で統計的に有意に異なるとはいえないが、他の2項目については有意差が認められる。

表20 群ごとの警察の命令に従う義務

自分の意見と異なっている、警察の決定を支持すること (ウェイトバック前)													
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	わからない	
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	19.5%	4.9%	8.3%	11.1%	9.2%	22.4%	7.7%	5.4%	4.0%	1.2%	2.6%	3.7%
	調整済み残差	5.00	7.77	7.90	2.86	1.41	-7.79	-3.98	-4.62	-2.06	0.27	-0.30	-2.26
被職質経験なし群 (n=5,483)	行%	15.9%	2.2%	4.6%	9.5%	8.5%	28.9%	9.9%	7.6%	4.8%	1.1%	2.7%	4.6%
	調整済み残差	-5.00	-7.77	-7.90	-2.86	-1.41	7.79	3.98	4.62	2.06	-0.27	0.30	2.26
$\chi^2_{(11)} = 235.097, p<0.001, \text{Cramer's } V=0.146$													
(ウェイトバック後)													
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	わからない	
被職質経験あり群	行%	17.9%	5.4%	9.0%	11.7%	9.7%	21.3%	8.3%	5.4%	3.9%	1.5%	2.7%	3.3%
	調整済み残差	3.79	9.13	9.14	4.82	1.52	-7.78	-3.73	-6.52	-2.64	0.65	0.18	-4.12
被職質経験なし群	行%	15.2%	2.1%	4.6%	8.9%	8.8%	27.7%	10.4%	8.6%	5.0%	1.3%	2.6%	4.8%
	調整済み残差	-3.79	-9.13	-9.14	-4.82	-1.52	7.78	3.73	6.52	2.64	-0.65	-0.18	4.12
理由が分からなかったり、その理由に同意していない、警察の言うことにしたがうこと (ウェイトバック前)													
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	わからない	
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	22.0%	6.5%	9.3%	12.4%	10.0%	18.3%	7.5%	4.6%	3.1%	1.2%	2.2%	3.0%
	調整済み残差	1.63	7.33	5.69	-0.12	0.55	-7.34	-1.28	-2.55	0.50	1.39	0.80	-1.97
被職質経験なし群 (n=5,483)	行%	20.7%	3.5%	6.4%	12.5%	9.7%	24.1%	8.1%	5.7%	2.9%	0.9%	2.0%	3.6%
	調整済み残差	-1.63	-7.33	-5.69	0.12	-0.55	7.34	1.28	2.55	-0.50	-1.39	-0.80	1.97
$\chi^2_{(11)} = 139.889, p<0.001, \text{Cramer's } V=0.113$													
(ウェイトバック後)													
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	わからない	
被職質経験あり群	行%	20.0%	7.0%	9.4%	12.9%	10.6%	17.5%	8.2%	4.8%	3.3%	1.2%	2.2%	2.6%
	調整済み残差	1.04	8.66	5.92	1.01	1.62	-7.97	-0.95	-3.57	-0.05	0.81	0.60	-3.46
被職質経験なし群	行%	19.3%	3.4%	6.4%	12.3%	9.7%	23.7%	8.8%	6.4%	3.4%	1.1%	2.0%	3.8%
	調整済み残差	1.04	-8.66	-5.92	-1.01	-1.62	7.97	0.95	3.57	0.05	0.81	-0.60	3.46

表20 群ごとの警察の命令に従う義務（つづき）

警察の対応が気に入らなくても、警察の言うことにしたがうこと (ウェイトバック前)											
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
被職質経験あり群 (n=5,483)	20.4%	6.6%	8.3%	11.5%	9.7%	19.4%	8.8%	5.3%	3.0%	1.3%	2.6%
	行 %										
被職質経験なし群 (n=5,483)	5.09	8.97	5.75	3.20	0.06	-8.64	-2.82	-4.00	-3.05	-0.33	-0.18
	調整済み残差										
	16.6%	3.0%	5.5%	9.6%	9.7%	26.3%	10.4%	7.1%	4.1%	1.4%	2.7%
	行 %										
	-5.09	-8.97	-5.75	-3.20	-0.06	8.64	2.82	4.00	3.05	0.33	0.18
	調整済み残差										
$\chi^2_{(11)} = 229.436, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.145$											
(ウェイトバック後)											
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
被職質経験あり群	18.3%	7.4%	8.5%	11.8%	10.5%	18.3%	9.2%	5.7%	3.4%	1.6%	2.6%
	行 %										
被職質経験なし群	3.85	10.99	7.03	5.06	0.60	-9.21	-3.22	-5.23	-3.32	-0.45	0.00
	調整済み残差										
	15.6%	2.8%	5.1%	8.9%	10.2%	25.6%	11.1%	8.3%	4.6%	1.7%	2.6%
	行 %										
	-3.85	-10.99	-7.03	-5.06	-0.60	9.21	3.22	5.23	3.32	0.45	0.00
	調整済み残差										

ころと同じく、職質という実際の経験により、警察に対する捉え方が明確になったためであるかもしれない。また、0から10の回答割合でいえば、いずれの項目においても義務がないとする方向での回答の割合が「被職質経験あり群」において大きくなっている。これも、7-1で述べたところと同じく、全体としてみたときに職務質問が警察に対する印象を悪化させる方向で作用していることの根拠とすることはできないが、少なくとも本サンプルにおける「被職質経験あり群」においては、どちらかといえば警察に対して否定的な印象を有している者が相対的に多く含まれていることを示していると考えられる。「わからない」を欠損値としたうえで、0から10までの値をとる量的変数として平均値の比較を行ったところ（表21）、いずれの項目に関しても「被職質経験なし群」に比べて「被職質経験あり群」において平均値が低かった（すなわち、「被職質経験あり群」の方が、「被職質経験なし群」に比べて「義務はない」という方向に回答が偏っていた）。

表21 群ごとの警察の命令に従う義務の平均値の比較

(ウェイトバック前)		度数	平均値	標準偏差	t 値
自分の意見と異なっている、警察の決定を支持すること	被職質経験あり群	5280	4.70	2.660	-10.746 ***
	被職質経験なし群	5233	5.25	2.578	
理由が分からなかったり、その理由に同意していても、警察の言うことにしたがうこと	被職質経験あり群	5320	4.38	2.631	-5.446 ***
	被職質経験なし群	5283	4.66	2.574	
警察の対応が気に入らなくても、警察の言うことにしたがうこと	被職質経験あり群	5320	4.56	2.665	-10.941 ***
	被職質経験なし群	5288	5.12	2.598	

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

注) いずれの項目も等分散性の仮定が成り立たなかったため、Welch の検定によっている。

7-3. 警察による道徳的価値観の共有

Q36において、警察が自分たちとどの程度道徳的価値観を共有していると思うかを、「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」までの4件法で尋ねている。回答の分布をみると、表22の通りである。「警察は、一般的に、私と同じ善悪の感覚を持っている」「警察は、私のような人びとにとって大切な価値観を守っている」および「私は、一般的に警察のやり方を支持している」に関しては、否定的な回答が4割弱ある一方で6割強は肯定的である。警察の道徳的価値観に対する信頼は一定程度確保されている一方で、否定的な意見が4割弱もいる点には留意しておく必要があろう。あわせて、「警察の決定や活動は、不当に政党や政治家からの圧力による影響を受けている」についても肯定的な回答が6割強ある。政治的な影響を不当に受けているという認識は、少なくとも本サンプルにおいては半数を超えて認められる。

ここで、この警察の道徳的価値観共有の程度に関する認識が、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」とで異なっているかどうかをみるために、クロス集計を行い、独立性の検定を行った(表23)。警察の手続的公正の信頼において述べたのと同様に(7-1を参照)、いずれの項目も「とてもそう思う」と「まったくそう思わない」の回答割合が、

研究ノート

表22 警察の道徳的価値観共有

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
警察は、一般的に、私と同じ善悪の感覚を持っている			
とてもそう思う	8.8	(967)	9.4
ある程度そう思う	55.2	(6,057)	54.0
あまりそう思わない	25.6	(2,808)	26.1
まったくそう思わない	10.3	(1,134)	10.6
合計	100.0	(10,966)	100.0
警察は、私のような人びとにとって大切な価値観を守っている			
とてもそう思う	8.7	(951)	9.7
ある程度そう思う	52.9	(5,804)	51.6
あまりそう思わない	28.0	(3,071)	28.1
まったくそう思わない	10.4	(1,140)	10.6
合計	100.0	(10,966)	100.0
私は、一般的に警察のやり方を支持している			
とてもそう思う	9.3	(1,024)	10.5
ある程度そう思う	52.5	(5,755)	51.2
あまりそう思わない	26.1	(2,864)	26.2
まったくそう思わない	12.1	(1,323)	12.1
合計	100.0	(10,966)	100.0
警察の決定や活動は、不当に政党や政治家からの圧力による影響を受けている			
とてもそう思う	19.1	(2,091)	19.4
ある程度そう思う	42.9	(4,703)	42.3
あまりそう思わない	31.3	(3,434)	31.2
まったくそう思わない	6.7	(738)	7.1
合計	100.0	(10,966)	100.0

「被職質経験あり群」において、「被職質経験なし群」よりも高い⁽³²⁾。これも、警察との具体的な接触経験により、警察に対する認識が明確化したためと捉えることができそうである。また、中間的な回答についてみ

(32) ただし、ウェイトバック前の集計をもとに残差分析を行うと、「警察の決定や活動は、不当に政党や政治家からの圧力による影響を受けている」以外の3項目では、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」との間で「とてもそう思

(甲南法学'25) 65-1・2・3・4-116 (116)

警察官による市民接触行動の規定要因とインパクトに関する縦断的研究

表23 群ごとの警察の道徳的価値観共有

警察は、一般的に、私と同じ善悪の感覚を持っている					
(ウェイトバック前)		とても そう思う	ある程度 そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	9.1%	48.6%	29.1%	13.2%
	調整済み残差	1.11	-14.00	8.31	9.91
被職質経験なし群 (n=5,483)	行%	8.5%	61.9%	22.1%	7.5%
	調整済み残差	-1.11	14.00	-8.31	-9.91
$\chi^2_{(3)} = 228.347, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.144$					
(ウェイトバック後)		とても そう思う	ある程度 そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない
被職質経験あり群	行%	10.0%	46.7%	29.7%	13.5%
	調整済み残差	2.46	-15.33	8.79	9.95
被職質経験なし群	行%	8.7%	61.3%	22.4%	7.7%
	調整済み残差	-2.46	15.33	-8.79	-9.95
警察は、私のような人びとにとって大切な価値観を守っている					
(ウェイトバック前)		とても そう思う	ある程度 そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	9.0%	46.6%	31.0%	13.4%
	調整済み残差	1.32	-13.24	6.91	10.26
被職質経験なし群 (n=5,483)	行%	8.3%	59.2%	25.0%	7.4%
	調整済み残差	-1.32	13.24	-6.91	-10.26
$\chi^2_{(3)} = 212.871, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.139$					
(ウェイトバック後)		とても そう思う	ある程度 そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない
被職質経験あり群	行%	10.4%	45.5%	30.8%	13.3%
	調整済み残差	2.38	-12.83	6.39	9.20
被職質経験なし群	行%	9.0%	57.7%	25.3%	7.9%
	調整済み残差	-2.38	12.83	-6.39	-9.20
私は、一般的に警察のやり方を支持している					
(ウェイトバック前)		とても そう思う	ある程度 そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	9.6%	46.3%	28.7%	15.4%
	調整済み残差	0.98	-12.95	6.09	10.76
被職質経験なし群 (n=5,483)	行%	9.1%	58.7%	23.6%	8.7%
	調整済み残差	-0.98	12.95	-6.09	-10.76
$\chi^2_{(3)} = 209.699, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.138$					
(ウェイトバック後)		とても そう思う	ある程度 そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない
被職質経験あり群	行%	11.1%	45.0%	28.9%	15.0%
	調整済み残差	1.99	-13.03	6.45	9.39
被職質経験なし群	行%	9.9%	57.4%	23.5%	9.2%
	調整済み残差	-1.99	13.03	-6.45	-9.39

研究ノート

表23 群ごとの警察の道徳的価値観共有（つづき）

警察の決定や活動は、不当に政党や政治家からの圧力による影響を受けている					
(ウェイトバック前)		とても そう思う	ある程度 そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない
被職質経験あり群 (n = 5, 483)	行%	20.5%	40.9%	30.6%	8.0%
	調整済み残差	3.72	-4.23	-1.56	5.41
被職質経験なし群 (n = 5, 483)	行%	17.7%	44.9%	32.0%	5.4%
	調整済み残差	-3.72	4.23	1.56	-5.41
$\chi^2_{(3)} = 50.398, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.068$					
(ウェイトバック後)		とても そう思う	ある程度 そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない
被職質経験あり群	行%	21.3%	40.0%	30.4%	8.2%
	調整済み残差	5.06	-4.84	-1.66	4.49
被職質経験なし群	行%	17.5%	44.6%	31.9%	6.0%
	調整済み残差	-5.06	4.84	1.66	-4.49

表みると、「警察は、一般的に、私と同じ善悪の感覚を持っている」「警察は、私のような人びとにとって大切な価値観を守っている」および「私は、一般的に警察のやり方を支持している」に関しては、「被職質経験あり群」では「被職質経験なし群」に比べて、「ある程度そう思う」が少なく、「あまりそう思わない」が多い。そのため、「被職質経験あり群」の方が、「被職質経験なし群」に比して、警察が自分たちと道徳的な価値観を共有しているという信念が弱い傾向にある。各項目につき肯定的な意見（「とてもそう思う」と「ある程度そう思う」）の割合をみると、「警察は、一般的に、私と同じ善悪の感覚を持っている」は、「被職質経験あり群」で57.7%、「被職質経験なし群」で70.4%（ウェイトバック後は前者が56.7%で後者が69.9%）、「警察は、私のような人びとにとって大切な価値観を守っている」は、「被職質経験あり群」で55.6%、「被職質経験なし群」で67.6%（ウェイトバック後は前者が55.9%で後者が66.8%）、「私は、一般的に警察のやり方を支持している」は、「被職質経験あり群」で55.9%、「被職質経験なし群」で67.7%

う」の回答割合に統計的に有意な差があるとまではいえない。

(ウェイトバック後は前者が56.0%で後者が67.3%)であり、「被職質経験あり群」で肯定的な回答割合が相対的に低い傾向がみられる。⁽³³⁾ 他方で、「警察の決定や活動は、不当に政党や政治家からの圧力による影響を受けている」は、「被職質経験あり群」で61.4%、「被職質経験なし群」で62.6% (ウェイトバック後は前者が61.3%で後者が62.1%) で、⁽³⁴⁾ 両群の差はほとんどない。

7-4. 警察の不公正さの認識

Q37において、警察の不公正さに関する認識について、「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの4件法で尋ねている。⁽³⁵⁾

(33) 「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」との間における肯定的な回答割合の差は、いずれの項目についても統計的に有意であった。「警察は、一般的に、私と同じ善悪の感覚を持っている」「警察は、私のような人びとにとって大切な価値観を守っている」「私は、一般的に警察のやり方を支持している」の項目の順に、 $\chi^2_{(1)} = 191.852, p < 0.001$, Cramer's $V = 0.132$, $\chi^2_{(1)} = 164.386, p < 0.001$, Cramer's $V = 0.122$, $\chi^2_{(1)} = 161.729, p < 0.001$, Cramer's $V = 0.121$ であった。

(34) この差は統計的に有意ではない。 $\chi^2_{(1)} = 1.685, p = 0.194$, Cramer's $V = 0.012$ 。

(35) これも、「先行調査」における質問項目を参考としたものである。ただし、「先行調査」では、警察の対応や冤罪被害を受ける確率が、経済的階層や人種／民族によって異なるかどうかを3つの選択肢から選ぶよう求めたことで尋ねており、かつ「わからない」の選択肢が用意されている。本調査では、冤罪被害の可能性についての質問は採用せず、もっぱら警察の対応に着目して、質問することとした。また、人種／民族についても、近時のレイシャル・プロファイリングに関する問題提起（宮下（2023）を参照）を踏まえ、「外国人や外国人のように見える人」に対する対応に絞って尋ねることとした。もっとも、本調査はインターネット調査会社に登録したモニターを対象に日本語で行った調査であり、必ずしも外国人を調査対象として多く含むことを計画した調査ではないことは、念のため注意されたい。

なお、日本においてレイシャル・プロファイリングという言葉が広まったきっかけとして、東京駅構内において発生した職務質問の映像が2021年1月に公開された出来事が挙げられる。そして、同年12月にアメリカ大使館がツイッター（現

回答の分布をみると、表24の通りである。いずれの項目においても、賛否が拮抗している。

ここで、この警察の不公正さに関する認識が、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」とで異なっているかどうかをみるために、クロス集計を行い、独立性の検定を行った（表25）。ここでも、「被職質経験あり群」では、「被職質経験なし群」に比べて、「とてもあてはまる」や

表24 警察の不公正さの認識

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
警察の対応は、相手が裕福な人か貧しい人かで違っている			
とてもあてはまる	13.9	(1,519)	13.8
ある程度あてはまる	38.0	(4,165)	36.7
あまりあてはまらない	38.5	(4,226)	38.7
まったくあてはまらない	9.6	(1,056)	10.7
合計	100.0	(10,966)	100.0
警察は、外国人や外国人のように見える人を集中的に見張っている			
とてもあてはまる	9.7	(1,060)	10.0
ある程度あてはまる	41.4	(4,536)	41.4
あまりあてはまらない	40.7	(4,458)	39.4
まったくあてはまらない	8.3	(912)	9.1
合計	100.0	(10,966)	100.0

在はX)によりレイシャル・プロファイリングについての注意喚起を行い、同月中に警察庁は、そのような職務質問を控えるべきとの通知を出し、翌年11月には内部調査の結果を公表した。その内部調査では、人種差別的な意図はないが不適切な事例が少数ながらあることが、レイシャル・プロファイリングが適切ではないという認識とあわせて示されていた（以上につき、宮下（2023：19-20；30-31；40-43；99）を参照）。

本調査は、2023年6月7日に開始され、過去1年の職務質問を受けた経験を尋ねているので、すでに警察庁によってレイシャル・プロファイリングにあたるような職務質問は控えるべきとの通知が全都道府県警察に発出された後の時期の経験を尋ねていることになる。

警察官による市民接触行動の規定要因とインパクトに関する縦断的研究

表25 群ごとの警察の不公平さの認識

警察の対応は、相手が裕福な人か貧しい人で違っている					
(ウェイトバック前)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	16.0%	38.2%	35.1%	10.7%
	調整済み残差	6.55	0.41	-7.30	3.69
被職質経験なし群 (n=5,483)	行%	11.7%	37.8%	41.9%	8.6%
	調整済み残差	-6.55	-0.41	7.30	-3.69
$\chi^2_{(3)} = 82.136, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.087$					
(ウェイトバック後)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群	行%	15.9%	36.0%	36.0%	12.0%
	調整済み残差	6.39	-1.46	-5.85	4.36
被職質経験なし群	行%	11.7%	37.4%	41.5%	9.4%
	調整済み残差	-6.39	1.46	5.85	-4.36
警察は、外国人や外国人のように見える人を集中的に見張っている					
(ウェイトバック前)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	11.9%	42.3%	36.3%	9.4%
	調整済み残差	8.08	2.09	-9.33	4.22
被職質経験なし群 (n=5,483)	行%	7.4%	40.4%	45.0%	7.2%
	調整済み残差	-8.08	-2.09	9.33	-4.22
$\chi^2_{(3)} = 129.536, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.109$					
(ウェイトバック後)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群	行%	12.4%	42.1%	35.1%	10.4%
	調整済み残差	8.21	1.43	-9.20	4.61
被職質経験なし群	行%	7.7%	40.7%	43.7%	7.9%
	調整済み残差	-8.21	-1.43	9.20	-4.61

「まったくあてはまらない」という強い意見の回答割合が増えている。肯定的な方向であれ、否定的な方向であれ、警察官との接触経験がある者の方が、警察に対するイメージが明確化されているようである。また、中間的な回答についていえば、「被職質経験あり群」において「あまりあてはまらない」の回答割合が下がっている。そのため、「被職質経験あり群」では、「被職質経験なし群」に比べて、警察の不公平を感じている者の割合がやや多い。各項目につき肯定的な意見（「とてもあてはまる」と「ある程度あてはまる」）の割合をみると、「警察の対応は、相

手が裕福な人が貧しい人かで違っている」は、「被職質経験あり群」で54.2%、「被職質経験なし群」で49.5%（ウェイトバック後は前者が52.0%で後者が49.1%）で、「警察は、外国人や外国人のように見える人を集中的に見張っている」は、「被職質経験あり群」で54.3%、「被職質経験なし群」で47.8%（ウェイトバック後は前者が54.5%で後者が48.4%）である。⁽³⁶⁾

ここで、Q34は警察の公正さに対する信頼を尋ねており（7-1を参照）、このQ37は、警察の不正さについての認識を尋ねている。もっとも、それぞれが問題としている公正・不公正の局面は必ずしも同一ではないため（前者が手続的公正、後者が分配的公正と整理できる（ISRD-JAPAN 実行委員会 2024：112））、単純にそれらを比較することはできないが、試みに両者の相関を確認したのが表26である（ここでは、Q34とQ37の各項目の回答を、すべて順序尺度と捉え、スピアマンの順位相関係数を算出している）。これによると、警察の公正に対する信頼にかかる3項目は、いずれもその内部の相関は高い。対して、警察の不公正の認識に関する2項目の相関は、それに比べると、やや低い。そして、警察の公正に対する信頼と警察の不公正の認識に関する相関は、統計的に有意ではあるものの、すべて弱い相関、ないしは実質的な相関関係が認められない程度のもにとどまっている。したがって、警察が公正に対応しているという評価と、警察活動に不公正が存するという認識は、必ずしも表裏一体のものではなく、それぞれが一定程度異なる要因によって規定されているものと考えられる。

(36) 「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」との間における肯定的な回答割合の差は、いずれの項目についても統計的に有意であった。「警察の対応は、相手が裕福な人が貧しい人かで違っている」「警察は、外国人や外国人のように見える人を集中的に見張っている」の項目の順に、 $\chi^2_{(1)} = 24.313, p < 0.001$, Cramer's $V = 0.047$, $\chi^2_{(1)} = 46.769, p < 0.001$, Cramer's $V = 0.065$ であった。

表26 警察の公正に対する信頼と警察の不正の認識の相関

(ウェイトバック前)	警察は事件を偏見なく公平に 処理している	警察は、自らの処分や措置に ついて説明を求められると、 しっかり応じている	警察の対応は、相手が裕福な 人が貧しい人かで違っている	警察は、外国人や外国人のよ うに見える人を集中的に見 張っている
警察は人びとに対して敬意を 払っている	0.709 ***	0.674 ***	-0.247 ***	-0.099 ***
警察は事件を偏見なく公平に処 理している		0.719 ***	-0.294 ***	-0.125 ***
警察は、自らの処分や措置につ いて説明を求められると、しっ かり応じている			-0.290 ***	-0.108 ***
警察の対応は、相手が裕福な人 か貧しい人かで違っている				0.462 ***

* p< .05, ** p< .01, *** p< .001

7-5. 警察に対する総合評価

Q38では、警察に対する総合的な評価が尋ねられている。すなわち、「警察が本来期待されているすべての役割を考えると、警察はよくやっていると思いますか」という問いに対して、「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」までの4件法で回答を求めている。回答の分布をみると、表27の通りである。どちらかといえば、肯定的な回答の方が多数を占めている。

ここで、この警察に対する総合評価が、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」とで異なっているかどうかをみるために、クロス集計を行い、独立性の検定を行った（表28）。ここでも、「被職質経験あり

表27 警察に対する総合評価

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
とてもそう思う	9.5	(1,040)	10.0
ある程度そう思う	56.6	(6,204)	55.5
あまりそう思わない	23.9	(2,624)	24.5
まったくそう思わない	10.0	(1,098)	10.1
合計	100.0	(10,966)	100.0

表28 群ごとの警察に対する総合評価

(ウェイトバック前)		とても そう思う	ある程度 そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	9.3%	51.1%	26.6%	13.0%
	調整済み残差	-0.78	-11.60	6.67	10.43
被職質経験なし群 (n=5,483)	行%	9.7%	62.1%	21.2%	7.0%
	調整済み残差	0.78	11.60	-6.67	-10.43
$\chi^2_{(3)} = 190.793, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.132$					
(ウェイトバック後)		とても そう思う	ある程度 そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない
被職質経験あり群	行%	10.6%	49.4%	27.0%	12.9%
	調整済み残差	2.39	-12.78	6.20	9.86
被職質経験なし群	行%	9.3%	61.5%	21.9%	7.3%
	調整済み残差	-2.39	12.78	-6.20	-9.86

群」では、「被職質経験なし群」に比べて、「まったくそう思わない」という明確な意見の回答割合が増えている（ただし、「とてもそう思う」については、少なくともウェイトバック前の分析では、「被職質経験あり群」の回答割合が「被職質経験なし群」の回答割合を上回るという関係はみられなかった）。ここでも、警察官との接触経験がある場合に、警察に対するイメージが明確化している可能性が示唆されている。また、中間的な回答についていえば、「被職質経験あり群」において「あまりそう思わない」の回答割合が多く、「ある程度そう思う」の回答割合が少ない。そのため、「被職質経験あり群」では、「被職質経験なし群」に比べて、警察の総合評価が相対的に低い者の割合がやや多い。肯定的な意見（「とてもそう思う」と「ある程度そう思う」）の割合をみると、「被職質経験あり群」で60.4%、「被職質経験なし群」で71.8%（ウェイトバック後は前者が60.0%で後者が70.8%）である。⁽³⁷⁾

7-6. 警察への協力行動意図

Q39では、外出中に誰かが男性を地面に押さえつけて財布を奪い取る現場を目撃したとして、その際に、警察にどの程度協力する意図があるかを3項目について4件法で尋ねている。回答の分布は、表29の通りである。いずれの項目においても多数が協力すると答えているが、「警察に通報する」と「犯人を特定するために警察の捜査に協力する」でも、協力しないという方向での回答が一定数あり、その割合は「裁判で犯人を有罪とするために証言する」においてやや高まる。

ここで、この警察への協力行動意図が、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」とで異なっているかどうかをみるために、クロス集計を行い、独立性の検定を行った（表30）。いずれの項目についても「おそらくしない」と「しない」の回答割合が、「被職質経験あり群」で多

(37) この差は統計的に有意である。 $\chi^2_{(1)} = 159.383, p < 0.001$, Cramer's V = 0.121。

表29 警察への協力行動意図

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
警察に通報する			
する	52.0	(5,698)	48.9
おそらくする	35.8	(3,929)	36.5
おそらくしない	8.8	(961)	10.4
しない	3.4	(378)	4.2
合計	100.0	(10,966)	100.0
犯人を特定するために警察の捜査に協力する			
する	43.7	(4,796)	40.7
おそらくする	42.8	(4,690)	43.3
おそらくしない	9.4	(1,034)	11.1
しない	4.1	(446)	4.8
合計	100.0	(10,966)	100.0
裁判で犯人を有罪とするために証言する			
する	31.4	(3,445)	29.0
おそらくする	44.6	(4,892)	44.0
おそらくしない	18.1	(1,982)	20.1
しない	5.9	(647)	6.9
合計	100.0	(10,966)	100.0

くなっている。これまでに紹介してきた警察に対する様々な評価等においては、「被職質経験なし群」に比して「被職質経験あり群」において、否定的な方向だけでなく、肯定的な方向においても明確な意見を選択する者の割合が大きくなる傾向がみられたが、ここでは、「する」という肯定方向での明確な回答割合が「被職質経験あり群」で大きいという傾向はみられず、むしろいずれの項目においても「被職質経験なし群」よりその回答割合が小さかった。その因果的な関連について明確な結論を出すことはできないが（7-1を参照）、いずれにせよ本サンプルの「被職質経験あり群」には、「被職質経験なし群」に比して、警察に対する協力行動意図が低めの者が多く含まれている。肯定的な意見（「する」

(甲南法学'25) 65-1・2・3・4-126 (126)

警察官による市民接触行動の規定要因とインパクトに関する縦断的研究

表30 群ごとの警察への協力行動意図

警察に通報する					
(ウェイトバック前)		する	おそらくする	おそらくしない	しない
被職質経験あり群 (n = 5, 483)	行%	47.5%	36.7%	11.5%	4.4%
	調整済み残差	-9.40	1.93	9.96	5.23
被職質経験なし群 (n = 5, 483)	行%	56.4%	34.9%	6.1%	2.5%
	調整済み残差	9.40	-1.93	-9.96	-5.23
$\chi^2_{(3)} = 161.889, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.122$					
(ウェイトバック後)		する	おそらくする	おそらくしない	しない
被職質経験あり群	行%	44.1%	37.0%	13.8%	5.1%
	調整済み残差	-10.06	1.06	11.71	4.72
被職質経験なし群	行%	53.7%	36.0%	7.0%	3.3%
	調整済み残差	10.06	-1.06	-11.71	-4.72
犯人を特定するために警察の捜査に協力する					
(ウェイトバック前)		する	おそらくする	おそらくしない	しない
被職質経験あり群 (n = 5, 483)	行%	39.6%	43.2%	11.8%	5.4%
	調整済み残差	-8.82	0.93	8.50	7.25
被職質経験なし群 (n = 5, 483)	行%	47.9%	42.3%	7.1%	2.7%
	調整済み残差	8.82	-0.93	-8.50	-7.25
$\chi^2_{(3)} = 160.054, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.121$					
(ウェイトバック後)		する	おそらくする	おそらくしない	しない
被職質経験あり群	行%	36.5%	43.7%	13.4%	6.4%
	調整済み残差	-8.94	0.67	7.79	7.53
被職質経験なし群	行%	44.9%	43.0%	8.8%	3.3%
	調整済み残差	8.94	-0.67	-7.79	-7.53
裁判で犯人を有罪とするために証言する					
(ウェイトバック前)		する	おそらくする	おそらくしない	しない
被職質経験あり群 (n = 5, 483)	行%	30.5%	43.0%	19.5%	7.0%
	調整済み残差	-2.08	-3.42	3.92	4.90
被職質経験なし群 (n = 5, 483)	行%	32.3%	46.2%	16.6%	4.8%
	調整済み残差	2.08	3.42	-3.92	-4.90
$\chi^2_{(3)} = 44.662, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.064$					
(ウェイトバック後)		する	おそらくする	おそらくしない	しない
被職質経験あり群	行%	28.1%	42.7%	21.2%	8.0%
	調整済み残差	-2.15	-2.81	2.98	4.64
被職質経験なし群	行%	30.0%	45.4%	18.9%	5.7%
	調整済み残差	2.15	2.81	-2.98	-4.64

と「おそらくする」)の割合をみると、「警察に通報する」は、「被職質経験あり群」で84.2%、「被職質経験なし群」で91.4%（ウェイトバック後は前者が81.1%で後者が89.7%）、「犯人を特定するために警察の捜査に協力する」は、「被職質経験あり群」で82.8%、「被職質経験なし群」で90.2%（ウェイトバック後は前者が80.2%で後者が87.9%）、そして、「裁判で犯人を有罪とするために証言する」は、「被職質経験あり群」で73.5%、「被職質経験なし群」で78.6%（ウェイトバック後は前者が70.8%⁽³⁸⁾で後者が75.3%）である。

(38) 「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」との間における肯定的な回答割合の差は、いずれの項目についても統計的に有意であった。「警察に通報する」「犯人を特定するために警察の捜査に協力する」「裁判で犯人を有罪とするために証言する」の項目の順に、 $\chi^2_{(1)} = 132.731, p < 0.001$, Cramer's $V = 0.110$ 、 $\chi^2_{(1)} = 131.302, p < 0.001$, Cramer's $V = 0.109$ 、 $\chi^2_{(1)} = 38.945, p < 0.001$, Cramer's $V = 0.060$ であった。

8. まとめ（警察に対する態度）

以上までに、警察に対する態度に関わる諸質問について、第一波第2段階調査で得られた回答結果について紹介してきた。さらなる分析は今後の課題であるが、さしあたり本サンプルの特徴を把握するという観点から、以下の諸点を指摘することができよう。

- ・警察の公正さ／不公正さに関する評価は肯定・否定の割合が拮抗している（Q34とQ37）。
- ・警察が我々と同じような道徳的価値観を共有しているという信念（Q36）や、その総合評価（Q38）については、やや肯定的な回答が多いものの、その割合は6割程度にとどまっている。このように、警察の道徳的価値観共有については相対的に賛成の意見が多いものの、警察が不当に政治的圧力を受けているという印象（Q36の項目の1つ）は、むしろ6割ほどがそうに感じている。
- ・警察に従う義務感の程度（Q35）については、多くの人は意に反した命令にまで従う必要は強く感じておらず、警察であってもその命令に一定の正当性を要求していることがうかがえる。
- ・警察の活動への協力行動意図（Q39）は、一部に消極的な回答があるが、概ね協力的な回答が多かった。
- ・職質により、警察官と具体的に接触した経験がある者（「被職質経験あり群」）は、そのような接触経験がない者（「被職質経験なし群」）よりも警察の印象や評価が明確である者が多かった（Q34、Q36、Q37、Q38）。項目によって異なる部分もあるが、概して、否定的な方向での明確な意見の回答割合が多いだけでなく、肯定的な方向での明確な意見の回答割合も増えていた。
- ・このように、「被職質経験あり群」では、肯定的な方向であれ、否定

的な方向であれ、明確な意見の回答割合が多いが、しかし、中間的な選択肢についていえば、「被職質経験なし群」に比して否定的な方向での回答割合が多かった。結果として、「被職質経験あり群」では、「被職質経験なし群」に比して、警察に対して否定的な態度を有する者の割合が多かった（Q34、Q36、Q37、Q38）。あわせて、警察に従う義務感と警察の活動への協力意図については、「被職質経験なし群」に比して「被職質経験あり群」において否定的な回答割合が高い傾向にあった（Q35、Q39）。ただし、これらの「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」との間の警察に対する態度の差は、統計的に有意に認められるものであるが、その差は概して小さい（表17、20、23、25、28、30および注29、33、36、37、38に記した Cramer's V の各値を参照。ここでの分析結果では、大きくても0.15に満たない程度であった⁽³⁹⁾）。

以上の通り、本サンプルにおける警察に対する諸評価の回答分布と、それらが「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」とでどのように異なっているかを簡単に確認した。ただし、繰り返しになるが、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」において回答傾向に差がみられる部分があったものの、このような差が職務質問を受けた経験の有無によって形成されたという因果関係まで示されたわけではないことに注意を要する。職務質問を受けたことと警察への態度とがどのように関連しているかは、単に職務質問の有無という2値変数を用いるのではなく、その職務質問がどのようなものであったのかを示す諸変数をも用いたより詳細な分析や、第一波のみならず第二波調査のデータも含めた分析を要するが、これらの点は今後の課題である。

(39) Cramer's V の説明は、注61を参照。

9. 第一波第2段階調査の基礎的分析 (逸脱行動に対する評価やライフスタイル)

9-1. 逮捕の可能性

Q40では、6つの犯罪行為を挙げて、これらをした場合にどの程度逮捕される可能性があると思うかを、「多いにある」から「まったくない」までの4件法で尋ねている⁽⁴⁰⁾。先述したように、本調査の理論的背景の1つに手続的公正の理論があるが、そこでは、警察等との接触において手続的公正感を得られると、その後の法遵守行動や警察等への協力行動が高まることが想定されている。しかし、手続的公正理論を検証する研究では、公正感を基点とした法遵守だけでなく、サンクションを回避するための法遵守も対置して検討されている（注40でも触れているが、手続的公正と法遵守行動との関連を指摘した嚆矢的な研究である Tyler (2006) のシカゴにおける調査でも、各種行為に対する逮捕の可能性が変数として用意されている）。そこで、本調査でも、サンクションが実際に発動する主観的見積もりについて尋ねることとした。加えて、本調査は、手続的公正の理論だけでなく、日常活動理論にも依拠している。日常活動理論によれば、法執行機関との接触が監視者の存在を意識することにつながると考えられるため、やはり各種犯罪行為に対する逮捕可

(40) ここでも、具体的な設問の設計においては「先行調査」を参考にしてている。ただし、「先行調査」では侵入窃盗について、警察がその犯人を捕まえることにどのくらい成功しているかを0（全く成功していない）から10（非常に成功している）までのスケールによって尋ねている。本調査では、最終的に、この後言及する Tyler (2006) の調査項目も参考にしつつ、6つの犯罪行為について、それぞれ犯人が逮捕されて罰を受ける可能性（ここでは便宜的に、逮捕の可能性という）を尋ねるかたちとした（具体的には、Tyler (2006) の179頁以下にシカゴでの調査に用いた調査票が再掲されているが、そのうち188-189頁にあるQ36を参考にした）。

研究ノート

能性を、そのような監視者を意識する程度を示すものとして測定する必要がある(岡邊ほか(2024:385)を参照)。この質問の回答分布は、表31

表31 逮捕の可能性

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
住宅に忍び込んで、その家にあるお金や物を盗むこと			
多いにある	67.1	(7,360)	65.4
あるかもしれない	10.7	(1,171)	12.4
たぶんない	7.7	(846)	8.9
まったくない	14.5	(1,589)	13.3
合計	100.0	(10,966)	100.0
見知らぬ人と口論となり、その場でその人を殴って逃げること			
多いにある	56.7	(6,218)	55.4
あるかもしれない	22.5	(2,462)	23.7
たぶんない	9.8	(1,072)	10.3
まったくない	11.1	(1,214)	10.5
合計	100.0	(10,966)	100.0
違法薬物を購入して、それを使うこと			
多いにある	64.0	(7,017)	63.0
あるかもしれない	12.4	(1,361)	14.2
たぶんない	7.7	(846)	8.6
まったくない	15.9	(1,742)	14.2
合計	100.0	(10,966)	100.0
保険金の支払い請求をする際に、誇張したり嘘をついたりすること			
多いにある	46.9	(5,142)	48.7
あるかもしれない	28.4	(3,113)	27.6
たぶんない	11.4	(1,247)	11.6
まったくない	13.4	(1,464)	12.2
合計	100.0	(10,966)	100.0
盗品とおもわれるものを買うこと			
多いにある	35.1	(3,853)	36.2
あるかもしれない	35.9	(3,939)	35.6
たぶんない	16.2	(1,772)	16.3
まったくない	12.8	(1,402)	12.0
合計	100.0	(10,966)	100.0
自動車の運転中に信号無視をすること			
多いにある	43.8	(4,800)	43.9
あるかもしれない	33.0	(3,617)	32.7
たぶんない	13.6	(1,487)	13.9
まったくない	9.7	(1,062)	9.5
合計	100.0	(10,966)	100.0

の通りである。犯罪の内容によって違いはあるが、概ね、警察によってこれらの犯罪は逮捕される蓋然性が高いと認識されている。

ここで、この逮捕の可能性に関する認識が、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」とで異なっているかどうかをみるために、クロス集計を行い、独立性の検定を行った（表32）。いずれの項目についても「多いにある」の回答割合が、「被職質経験あり群」で少なくなっている。したがって、本調査のサンプルにおいては、「被職質経験あり群」において各種の犯罪行為の逮捕確率を低く見積もっている者が、「被職質経験なし群」におけるよりも多いことが分かる。先述したように、本調査においては職務質問を受けたことで監視者意識が高まる可能性を想定していたが、ここでは職務質問を受けた者の方が、逮捕可能性について低く見積もっていることが示されている。ただし、この第一波第2段階調査のデータから分かることは、相関関係にとどまり、因果関係ではないことに注意を要する。すなわち、上記結果からは、もともと各種犯罪行為の逮捕可能性を低く見積もっていたような者ほど職務質問を受ける蓋然性が高かったという関係性も想定可能である。このような想定に立ったとしても、なお、当初の低い逮捕可能性の見積もりが、警察による職務質問を受けたことで上方修正された可能性は否定されておらず、職務質問を受けることが各種犯罪の逮捕可能性の認識に対して及ぼす影響については、第一波調査だけでなく第二波調査も踏まえて吟味する必要があるが、この点は今後の課題である。

ともあれ、本サンプルにおいては、「被職質経験あり群」には、「被職質経験なし群」に比して、各種の犯罪行為について警察に逮捕される確率を低く見込んでいる者が多く含まれている。肯定的な意見（「多いにある」と「あるかもしれない」）の割合をみると、「住宅に忍び込んで、その家にあるお金や物を盗むこと」は、「被職質経験あり群」で73.6%、「被職質経験なし群」で82.0%（ウェイトバック後は前者が72.7%で後

研究ノート

表32 群ごとの逮捕の可能性

住宅に忍び込んで、その家にあるお金や物を盗むこと					
(ウェイトバック前)		多いにある	あるかもしれない	たぶんない	まったくない
被職質経験あり群 (n = 5, 483)	行%	59.5%	14.1%	10.8%	15.6%
	調整済み残差	-16.99	11.47	12.10	3.45
被職質経験なし群 (n = 5, 483)	行%	74.7%	7.3%	4.6%	13.3%
	調整済み残差	16.99	-11.47	-12.10	-3.45
$\chi^2_{(3)} = 357.691$, $p < 0.001$, Cramer's $V = 0.181$					
(ウェイトバック後)		多いにある	あるかもしれない	たぶんない	まったくない
被職質経験あり群	行%	56.5%	16.2%	12.6%	14.7%
	調整済み残差	-19.63	12.12	13.59	4.36
被職質経験なし群	行%	74.3%	8.6%	5.2%	11.9%
	調整済み残差	19.63	-12.12	-13.59	-4.36
見知らぬ人と口論となり、その場でその人を殴って逃げること					
(ウェイトバック前)		多いにある	あるかもしれない	たぶんない	まったくない
被職質経験あり群 (n = 5, 483)	行%	51.0%	25.2%	11.5%	12.3%
	調整済み残差	-11.95	6.87	6.05	4.02
被職質経験なし群 (n = 5, 483)	行%	62.4%	19.7%	8.1%	9.9%
	調整済み残差	11.95	-6.87	-6.05	-4.02
$\chi^2_{(3)} = 145.699$, $p < 0.001$, Cramer's $V = 0.115$					
(ウェイトバック後)		多いにある	あるかもしれない	たぶんない	まったくない
被職質経験あり群	行%	48.5%	27.4%	12.6%	11.6%
	調整済み残差	-14.64	8.91	7.85	3.58
被職質経験なし群	行%	62.4%	20.1%	8.0%	9.5%
	調整済み残差	14.64	-8.91	-7.85	-3.58
違法薬物を購入して、それを使うこと					
(ウェイトバック前)		多いにある	あるかもしれない	たぶんない	まったくない
被職質経験あり群 (n = 5, 483)	行%	57.0%	15.8%	10.2%	16.9%
	調整済み残差	-15.14	10.63	9.95	3.03
被職質経験なし群 (n = 5, 483)	行%	70.9%	9.1%	5.2%	14.8%
	調整済み残差	15.14	-10.63	-9.95	-3.03
$\chi^2_{(3)} = 280.571$, $p < 0.001$, Cramer's $V = 0.160$					
(ウェイトバック後)		多いにある	あるかもしれない	たぶんない	まったくない
被職質経験あり群	行%	54.9%	18.3%	11.5%	15.3%
	調整済み残差	-17.60	12.44	10.73	3.29
被職質経験なし群	行%	71.1%	10.0%	5.7%	13.1%
	調整済み残差	17.60	-12.44	-10.73	-3.29

警察官による市民接触行動の規定要因とインパクトに関する縦断的研究

表32 群ごとの逮捕の可能性（つづき）

保険金の支払い請求をする際に、誇張したり嘘をついたりすること					
(ウェイトバック前)		多いにある	あるかもしれない	たぶんない	まったくない
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	43.4%	28.9%	13.1%	14.6%
	調整済み残差	-7.27	1.08	5.62	3.99
被職質経験なし群 (n=5,483)	行%	50.4%	27.9%	9.7%	12.1%
	調整済み残差	7.27	-1.08	-5.62	-3.99
$\chi^2_{(3)} = 70.734, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.080$					
(ウェイトバック後)		多いにある	あるかもしれない	たぶんない	まったくない
被職質経験あり群	行%	44.2%	28.5%	14.0%	13.3%
	調整済み残差	-9.35	2.22	7.85	3.59
被職質経験なし群	行%	53.1%	26.6%	9.2%	11.0%
	調整済み残差	9.35	-2.22	-7.85	-3.59
盗品とおもわれるものを買うこと					
(ウェイトバック前)		多いにある	あるかもしれない	たぶんない	まったくない
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	33.5%	35.3%	17.2%	14.0%
	調整済み残差	-3.54	-1.41	3.01	3.77
被職質経験なし群 (n=5,483)	行%	36.7%	36.6%	15.1%	11.6%
	調整済み残差	3.54	1.41	-3.01	-3.77
$\chi^2_{(3)} = 29.432, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.052$					
(ウェイトバック後)		多いにある	あるかもしれない	たぶんない	まったくない
被職質経験あり群	行%	34.1%	34.8%	17.9%	13.2%
	調整済み残差	-4.51	-1.62	4.42	4.03
被職質経験なし群	行%	38.3%	36.3%	14.7%	10.7%
	調整済み残差	4.51	1.62	-4.42	-4.03
自動車の運転中に信号無視をすること					
(ウェイトバック前)		多いにある	あるかもしれない	たぶんない	まったくない
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	41.0%	33.2%	15.3%	10.5%
	調整済み残差	-5.89	0.59	5.22	2.91
被職質経験なし群 (n=5,483)	行%	46.6%	32.7%	11.9%	8.9%
	調整済み残差	5.89	-0.59	-5.22	-2.91
$\chi^2_{(3)} = 50.884, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.068$					
(ウェイトバック後)		多いにある	あるかもしれない	たぶんない	まったくない
被職質経験あり群	行%	40.5%	34.0%	15.5%	10.0%
	調整済み残差	-7.38	2.74	5.11	2.09
被職質経験なし群	行%	47.4%	31.5%	12.2%	8.9%
	調整済み残差	7.38	-2.74	-5.11	-2.09

者が82.9%)、「見知らぬ人と口論となり、その場でその人を殴って逃げること」は、「被職質経験あり群」で76.2%、「被職質経験なし群」で82.1% (ウェイトバック後は前者が75.9%で後者が82.5%)、「違法薬物を購入して、それを使うこと」は、「被職質経験あり群」で72.8%、「被職質経験なし群」で80.0% (ウェイトバック後は前者が73.2%で後者が81.2%)、「保険金の支払い請求をする際に、誇張したり嘘をついたりすること」は、「被職質経験あり群」で72.3%、「被職質経験なし群」で78.3% (ウェイトバック後は前者が72.7%で後者が79.8%)、「盗品とおもわれるものを買うこと」は、「被職質経験あり群」で68.8%、「被職質経験なし群」で73.3% (ウェイトバック後は前者が68.9%で後者が74.6%)、そして、「自動車の運転中に信号無視をすること」は、「被職質経験あり群」で74.2%、「被職質経験なし群」で79.3% (ウェイトバック後は前者が74.4%で後者が79.0%)⁽⁴¹⁾である。

(41) 「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」との間における肯定的な回答割合の差は、いずれの項目についても統計的に有意であった。「住宅に忍び込んで、その家にあるお金や物を盗むこと」「見知らぬ人と口論となり、その場でその人を殴って逃げること」「違法薬物を購入して、それを使うこと」「保険金の支払い請求をする際に、誇張したり嘘をついたりすること」「盗品とおもわれるものを買うこと」「自動車の運転中に信号無視をすること」の項目の順に、 $\chi^2_{(1)} = 114.145, p < 0.001$, Cramer's $V = 0.102$ 、 $\chi^2_{(1)} = 56.592, p < 0.001$, Cramer's $V = 0.072$ 、 $\chi^2_{(1)} = 78.512, p < 0.001$, Cramer's $V = 0.085$ 、 $\chi^2_{(1)} = 53.039, p < 0.001$, Cramer's $V = 0.070$ 、 $\chi^2_{(1)} = 27.271, p < 0.001$, Cramer's $V = 0.050$ 、 $\chi^2_{(1)} = 39.218, p < 0.001$, Cramer's $V = 0.060$ であった。

9-2. 逸脱行動の悪質性評価

Q41では、12項目の逸脱行為について、その悪質性を「とても悪い」から「まったく悪くない」までの7件法で尋ねている。これは、非行の自己申告式調査に基づくものであり、岡邊（2013：補論）の作成した質問項目に基づいている。非行の自己申告式調査では、これらの逸脱行為を実際に行った経験を探っているが、これらの質問は、調査会社により認められなかった。本調査は、警察官との接触がその後の法遵守ないし法違反行動に影響を及ぼす可能性を検証することを目的としており、その目的に照らせば、非行の自己申告式調査と同様に、これらの行為の経験の有無を探る方が適切であった。しかしながら、以上の事情により本調査ではそれを断念し、これらの逸脱行為の悪質性について尋ねることとした。悪質性の評価が低いほど、そのような行為に出る閾値が低く、結果としてそのような行為を行う蓋然性が高いという想定に立ち、この悪質性評価を、実際にそれらの行為を行うかどうかという行動指標の代理変数として用いることを意図している。⁽⁴²⁾ このQ41の回答分布は、表33の通りである。項目によって程度の差はあるが、いずれの項目も比較的悪い行為であるという評価は共有されているようである。各項目を「とても悪い」から「全く悪くない」までの順に並べ、その回答割合の累積%をみたのが表34であるが、最初の「とても悪い」の回答割合は項目によって違うものの、いずれの項目も「どちらかといえば悪い」までで累積%は、「ナイフを持ち歩くこと」の78.4%（ウェイトバック後は75.7%）を除けば、80%台後半から90%台前半である（項目数が多いため、グラフにより表現するとかえってみにくくなるため、ここでは表で示している）。

(42) 中学生を対象にした調査であるが、各種の逸脱行為に関する悪質性評価が低い者ほど、実際に非行行為を行う蓋然性が高いという関係が示されている（ISRD-JAPAN 実行委員会 2024：第5章：第8章）。

研究ノート

表33 逸脱行為の悪質性評価

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
バスや電車で、キセルや無賃乗車をする事			
とても悪い	40.9	(4,480)	39.7
悪い	37.8	(4,148)	36.2
どちらかといえば悪い	9.7	(1,068)	10.1
どちらともいえない	5.3	(584)	6.3
どちらかといえば悪くない	2.7	(291)	3.1
悪くない	2.1	(231)	3.0
まったく悪くない	1.5	(164)	1.7
合計	100.0	(10,966)	100.0
かつてに入ってはいけない場所や建物に入ること			
とても悪い	31.0	(3,398)	30.1
悪い	40.1	(4,394)	38.1
どちらかといえば悪い	17.7	(1,936)	18.1
どちらともいえない	6.7	(734)	7.6
どちらかといえば悪くない	2.7	(297)	3.6
悪くない	1.0	(111)	1.5
まったく悪くない	0.9	(96)	0.9
合計	100.0	(10,966)	100.0
家族以外の人の持ち物や乗り物（自動車・バイク・自転車など）を、わざとこわしたり、傷つけたり、燃やしたりすること（らくがきを含む）			
とても悪い	63.3	(6,938)	60.7
悪い	25.6	(2,808)	25.9
どちらかといえば悪い	6.1	(666)	7.0
どちらともいえない	3.5	(385)	4.6
どちらかといえば悪くない	0.7	(80)	1.0
悪くない	0.2	(26)	0.3
まったく悪くない	0.6	(63)	0.5
合計	100.0	(10,966)	100.0
広場などの公共の場所で、集団でさわぐこと			
とても悪い	24.5	(2,687)	23.4
悪い	38.4	(4,210)	36.4
どちらかといえば悪い	25.1	(2,747)	26.6
どちらともいえない	8.6	(938)	9.3
どちらかといえば悪くない	1.9	(207)	2.3
悪くない	0.7	(81)	1.1
まったく悪くない	0.9	(96)	0.9
合計	100.0	(10,966)	100.0

警察官による市民接触行動の規定要因とインパクトに関する縦断的研究

表33 逸脱行為の悪質性評価（つづき）

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
他人の自動車・バイク・スクーターの部品を持つこと			
とても悪い	64.8	(7,102)	60.9
悪い	22.9	(2,515)	23.7
どちらかといえば悪い	5.4	(593)	6.8
どちらともいえない	4.1	(453)	4.9
どちらかといえば悪くない	1.5	(160)	2.0
悪くない	0.6	(71)	0.9
まったく悪くない	0.7	(72)	0.7
合計	100.0	(10,966)	100.0
他人の自転車を、かってに乗り回したり、持っていったりすること			
とても悪い	61.2	(6,712)	57.7
悪い	26.0	(2,851)	26.4
どちらかといえば悪い	5.6	(613)	6.8
どちらともいえない	4.2	(458)	5.0
どちらかといえば悪くない	1.8	(197)	2.5
悪くない	0.6	(64)	0.9
まったく悪くない	0.6	(71)	0.7
合計	100.0	(10,966)	100.0
人をだまして、お金やものをとること			
とても悪い	72.4	(7,938)	68.1
悪い	14.9	(1,638)	16.0
どちらかといえば悪い	4.4	(486)	5.6
どちらともいえない	4.4	(482)	5.1
どちらかといえば悪くない	2.2	(243)	3.0
悪くない	1.0	(105)	1.6
まったく悪くない	0.7	(74)	0.7
合計	100.0	(10,966)	100.0
ナイフを持ち歩くこと			
とても悪い	33.2	(3,637)	31.7
悪い	26.1	(2,857)	24.9
どちらかといえば悪い	19.2	(2,104)	19.2
どちらともいえない	15.5	(1,701)	16.6
どちらかといえば悪くない	3.2	(355)	4.1
悪くない	1.6	(170)	2.1
まったく悪くない	1.3	(142)	1.5
合計	100.0	(10,966)	100.0

研究ノート

表33 逸脱行為の悪質性評価（つづき）

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
公共のもの（自動販売機・公衆電話・公園の植物など）、自宅以外の建物のかべや窓、 わざとこわしたり、傷つけたり、燃やしたりすること（らくがきを含む）			
とても悪い	60.3	(6,611)	58.0
悪い	28.0	(3,069)	27.8
どちらかといえば悪い	6.5	(712)	7.8
どちらともいえない	3.4	(375)	4.1
どちらかといえば悪くない	0.9	(98)	1.2
悪くない	0.4	(39)	0.5
まったく悪くない	0.6	(62)	0.5
合計	100.0	(10,966)	100.0
店から、こっそり商品を持ち出すこと			
とても悪い	67.2	(7,372)	63.2
悪い	20.8	(2,277)	21.8
どちらかといえば悪い	5.0	(546)	6.6
どちらともいえない	3.9	(433)	4.7
どちらかといえば悪くない	1.7	(181)	2.0
悪くない	0.7	(81)	0.9
まったく悪くない	0.7	(76)	0.8
合計	100.0	(10,966)	100.0
集団で自動車・バイク・スクーターに乗って、道路であぶないことをすること			
とても悪い	51.9	(5,686)	49.8
悪い	31.6	(3,470)	30.6
どちらかといえば悪い	8.8	(970)	10.3
どちらともいえない	4.6	(502)	5.4
どちらかといえば悪くない	1.8	(199)	2.3
悪くない	0.5	(60)	0.7
まったく悪くない	0.7	(79)	0.8
合計	100.0	(10,966)	100.0
家族以外の人に乱暴なことをしたり、「乱暴なことをするぞ」とおどかしたりすること			
とても悪い	56.7	(6,222)	54.4
悪い	28.8	(3,163)	28.8
どちらかといえば悪い	7.7	(844)	8.9
どちらともいえない	4.3	(469)	4.9
どちらかといえば悪くない	1.4	(153)	1.7
悪くない	0.4	(44)	0.6
まったく悪くない	0.6	(71)	0.6
合計	100.0	(10,966)	100.0

表34 逸脱行為の悪質性評価の累積%

	家族以外の人の持物(自動車・バイク・自転車・バイク・バイク・バイク)				他人の自他(自動車・バイク・バイク・バイク)				公共の場(自動車・バイク・バイク・バイク)				家族以外の人(自動車・バイク・バイク・バイク)			
	バスや電車で、セルや無賃乗車をすること	かつては入っていない場所や建物に入る	バイク・自転車・バイク・バイク	広場などの公共の場、集団でわぐこと	他人の自他(自動車・バイク・バイク・バイク)	他人の自他(自動車・バイク・バイク・バイク)	人々をだまして、お金の持ちこ	ナイフを持ち歩くこと	公共の場(自動車・バイク・バイク・バイク)	公共の場(自動車・バイク・バイク・バイク)	公共の場(自動車・バイク・バイク・バイク)	公共の場(自動車・バイク・バイク・バイク)	公共の場(自動車・バイク・バイク・バイク)	公共の場(自動車・バイク・バイク・バイク)	公共の場(自動車・バイク・バイク・バイク)	公共の場(自動車・バイク・バイク・バイク)
(ウェイトバック前)																
とても悪い	40.9%	31.0%	63.3%	24.5%	64.8%	61.2%	72.4%	33.2%	60.3%	67.2%	51.9%	56.7%	56.7%	56.7%	56.7%	56.7%
悪い	78.7%	71.1%	88.9%	62.9%	87.7%	87.2%	87.3%	59.2%	88.3%	88.0%	83.5%	85.6%	85.6%	85.6%	85.6%	85.6%
どちらかといえば悪い	88.4%	88.7%	94.9%	87.9%	93.1%	92.8%	91.8%	78.4%	94.8%	93.0%	92.3%	93.3%	93.3%	93.3%	93.3%	93.3%
どちらともいえない	93.7%	95.4%	98.5%	96.5%	97.2%	97.0%	96.2%	93.9%	98.2%	96.9%	96.9%	97.6%	97.6%	97.6%	97.6%	97.6%
どちらかといえば悪くない	96.4%	98.1%	99.2%	98.4%	98.7%	98.8%	98.4%	97.2%	99.1%	98.6%	98.7%	99.0%	99.0%	99.0%	99.0%	99.0%
悪くない	98.5%	99.1%	99.4%	99.1%	99.3%	99.4%	99.3%	98.7%	99.4%	99.3%	99.3%	99.4%	99.4%	99.4%	99.4%	99.4%
まったく悪くない	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
(ウェイトバック後)																
とても悪い	39.7%	30.1%	60.7%	23.4%	60.9%	57.7%	68.1%	31.7%	58.0%	63.2%	49.8%	54.4%	54.4%	54.4%	54.4%	54.4%
悪い	75.8%	68.2%	86.6%	59.7%	84.6%	84.2%	84.1%	56.5%	85.8%	85.0%	80.5%	83.2%	83.2%	83.2%	83.2%	83.2%
どちらかといえば悪い	85.9%	86.3%	93.6%	86.3%	91.4%	91.0%	89.6%	75.7%	93.7%	91.7%	90.7%	92.1%	92.1%	92.1%	92.1%	92.1%
どちらともいえない	92.2%	93.9%	98.1%	95.6%	96.4%	96.0%	94.7%	92.4%	97.8%	96.3%	96.1%	97.0%	97.0%	97.0%	97.0%	97.0%
どちらかといえば悪くない	95.3%	97.5%	99.1%	98.0%	98.4%	98.5%	97.7%	96.5%	99.0%	98.3%	98.3%	98.5%	98.5%	98.5%	98.5%	98.5%
悪くない	98.3%	99.1%	99.5%	99.1%	99.3%	99.3%	99.3%	98.5%	99.5%	99.2%	99.2%	99.4%	99.4%	99.4%	99.4%	99.4%
まったく悪くない	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

ここで、この逸脱行為の悪質性評価が、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」とで異なっているかどうかをみるために、クロス集計を行い、独立性の検定を行った（表35）。ここでは7件法により細かく尋ねているため、部分的に異なる傾向を示しているところもあるが、全体を通してみれば、「被職質経験あり群」において、悪いとの評価がやや少なく、他方で、「被職質経験なし群」において悪くないという評価が少ない。両群における各項目の平均値の差を検定した結果は表36にまとめた通りであるが、これによっても、「被職質経験なし群」よりも「被職質経験あり群」において、相対的に各項目につき悪質ではないという評価をする者が多いことが分かる（ここでは、数値が高いほど悪質性が高いと評価していることを意味するように、「まったく悪くない」から「とても悪い」までの選択肢に、1から7の数値を割り当てている）。

表35 群ごとの逸脱行為の悪質性評価

バスや電車で、キセルや無賃乗車をすること									
(ウェイトバック前)									
	とても悪い	悪い	どちらかと いえば悪い	どちらとも いえない	どちらかと いえば悪くない	悪くない	まったく 悪くない		
被職質経験あり群 (n = 5,483)	38.2%	33.6%	10.5%	6.9%	4.6%	3.7%	2.4%		
調整済み残差	-5.63	-9.02	2.71	7.57	12.89	11.64	7.40		
被職質経験なし群 (n = 5,483)	43.5%	42.0%	9.0%	3.7%	0.7%	0.5%	0.6%		
調整済み残差	5.63	9.02	-2.71	-7.57	-12.89	-11.64	-7.40		
$\chi^2_{(6)} = 478.474, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.209$									
(ウェイトバック後)									
	とても悪い	悪い	どちらかと いえば悪い	どちらとも いえない	どちらかと いえば悪くない	悪くない	まったく 悪くない		
被職質経験あり群	36.1%	31.5%	10.8%	8.3%	5.4%	5.2%	2.6%		
調整済み残差	-7.55	-10.15	2.51	8.74	13.85	13.68	7.44		
被職質経験なし群	43.2%	40.8%	9.4%	4.2%	0.8%	0.8%	0.8%		
調整済み残差	7.55	10.15	-2.51	-8.74	-13.85	-13.68	-7.44		
かつてに入っていない場所や建物に入ること									
(ウェイトバック前)									
	とても悪い	悪い	どちらかと いえば悪い	どちらとも いえない	どちらかと いえば悪くない	悪くない	まったく 悪くない		
被職質経験あり群 (n = 5,483)	30.2%	35.0%	18.3%	9.2%	4.2%	1.7%	1.4%		
調整済み残差	-1.78	-10.83	1.85	10.62	9.47	6.96	5.74		
被職質経験なし群 (n = 5,483)	31.8%	45.1%	17.0%	4.2%	1.2%	0.3%	0.4%		
調整済み残差	1.78	10.83	-1.85	-10.62	-9.47	-6.96	-5.74		
$\chi^2_{(6)} = 348.603, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.178$									
(ウェイトバック後)									
	とても悪い	悪い	どちらかと いえば悪い	どちらとも いえない	どちらかと いえば悪くない	悪くない	まったく 悪くない		
被職質経験あり群	28.6%	32.8%	18.5%	10.4%	5.7%	2.6%	1.4%		
調整済み残差	-3.34	-11.43	1.31	10.97	11.27	8.76	5.02		
被職質経験なし群	31.5%	43.5%	17.6%	4.9%	1.6%	0.5%	0.5%		
調整済み残差	3.34	11.43	-1.31	-10.97	-11.27	-8.76	-5.02		

表35 群ごとの逸脱行為の悪質性評価 (つづき)

家族以外の人の持ち物や乗り物 (自動車・バイク・自転車など) を、わざとこわしたり、燃やしたりすること (らくがきを含む)									
(ウェイトバック前)	とても悪い	悪い	どちらかと いえば悪い	どちらかと いえない	どちらとも いえない	どちらかと いえば悪くない	どちらかと いえない	悪くない	まったく 悪くない
被職質経験あり群 (n = 5,483)	行%	58.7%	26.0%	8.2%	4.7%	1.1%	0.4%	0.8%	
	調整済み残差	-9.90	0.96	9.28	6.90	4.71	4.32	3.41	
	行%	67.8%	25.2%	4.0%	2.3%	0.3%	0.0%	0.3%	
	調整済み残差	9.90	-0.96	-9.28	-6.90	-4.71	-4.32	-3.41	
$\chi^2_{(6)} = 215.722, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.140$									
(ウェイトバック後)	とても悪い	悪い	どちらかと いえば悪い	どちらとも いえない	どちらかと いえば悪くない	悪くない	まったく 悪くない		
被職質経験あり群	行%	55.4%	26.0%	9.4%	6.5%	1.4%	0.7%	0.6%	
	調整済み残差	-11.34	0.22	9.86	9.92	4.10	5.53	1.73	
	行%	66.0%	25.8%	4.6%	2.6%	0.6%	0.0%	0.4%	
	調整済み残差	11.34	-0.22	-9.86	-9.92	-4.10	-5.53	-1.73	
広場などの公共の場所での、集団でさわぐこと									
(ウェイトバック前)	とても悪い	悪い	どちらかと いえば悪い	どちらとも いえない	どちらかと いえば悪くない	悪くない	まったく 悪くない		
被職質経験あり群 (n = 5,483)	行%	26.4%	35.4%	23.7%	9.8%	2.5%	1.0%	1.3%	
	調整済み残差	4.60	-6.44	-3.33	4.58	4.56	3.46	4.31	
	行%	22.6%	41.4%	26.4%	7.3%	1.3%	0.5%	0.5%	
	調整済み残差	-4.60	6.44	3.33	-4.58	-4.56	-3.46	-4.31	
$\chi^2_{(6)} = 119.594, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.104$									
(ウェイトバック後)	とても悪い	悪い	どちらかと いえば悪い	どちらとも いえない	どちらかと いえば悪くない	悪くない	まったく 悪くない		
被職質経験あり群	行%	25.2%	33.6%	24.8%	10.6%	3.2%	1.5%	1.2%	
	調整済み残差	4.52	-5.99	-4.36	4.68	5.62	3.46	3.38	
	行%	21.5%	39.1%	28.5%	8.0%	1.5%	0.8%	0.6%	
	調整済み残差	-4.52	5.99	4.36	-4.68	-5.62	-3.46	-3.38	

表35 群ごとの逸脱行為の悪質性評価 (つづき)

他人の自動車・バイク・スクーターの部品を持つこと									
(ウェイトバック前)									
	とても悪い	悪い	どちらかと いえば悪い	どちらとも いえない	どちらかと いえば悪くない	悪くない	まったく 悪くない		
被職質経験あり群 (n = 5,483)	59.5%	22.9%	7.2%	6.0%	2.3%	1.0%	1.0%		
調整済み残差	-11.47	-0.11	8.32	9.84	7.65	5.12	4.49		
被職質経験なし群 (n = 5,483)	70.0%	23.0%	3.6%	2.3%	0.6%	0.3%	0.3%		
調整済み残差	11.47	0.11	-8.32	-9.84	-7.65	-5.12	-4.49		
$\chi^2_{(6)} = 308.315, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.168$									
(ウェイトバック後)									
	とても悪い	悪い	どちらかと いえば悪い	どちらとも いえない	どちらかと いえば悪くない	悪くない	まったく 悪くない		
被職質経験あり群	54.9%	23.5%	8.8%	7.2%	3.3%	1.4%	1.0%		
調整済み残差	-12.96	-0.56	8.12	11.05	9.05	5.48	3.95		
被職質経験なし群	66.9%	24.0%	4.9%	2.6%	0.8%	0.4%	0.4%		
調整済み残差	12.96	0.56	-8.12	-11.05	-9.05	-5.48	-3.95		
他人の自転車を、かってに乗り回したり、持っていくたりすること									
(ウェイトバック前)									
	とても悪い	悪い	どちらかと いえば悪い	どちらとも いえない	どちらかと いえば悪くない	悪くない	まったく 悪くない		
被職質経験あり群 (n = 5,483)	56.8%	24.7%	7.6%	6.0%	3.0%	0.9%	1.0%		
調整済み残差	-9.49	-2.98	9.02	9.64	9.13	4.76	4.41		
被職質経験なし群 (n = 5,483)	65.6%	27.2%	3.6%	2.3%	0.6%	0.2%	0.3%		
調整済み残差	9.49	2.98	-9.02	-9.64	-9.13	-4.76	-4.41		
$\chi^2_{(6)} = 331.111, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.174$									
(ウェイトバック後)									
	とても悪い	悪い	どちらかと いえば悪い	どちらとも いえない	どちらかと いえば悪くない	悪くない	まったく 悪くない		
被職質経験あり群	52.5%	24.8%	9.1%	7.1%	4.1%	1.4%	1.0%		
調整済み残差	-11.09	-3.77	9.49	10.29	10.68	5.87	3.73		
被職質経験なし群	63.0%	28.0%	4.6%	2.8%	0.9%	0.3%	0.4%		
調整済み残差	11.09	3.77	-9.49	-10.29	-10.68	-5.87	-3.73		

表35 群ごとの逸脱行為の悪質性評価 (つづき)

人をだまして、お金やものをとること								
(ウェイトバック前)								
被職質経験あり群 (n = 5,483)	行%	66.5%	14.9%	6.0%	6.4%	3.6%	1.6%	まったく悪くない
	調整済み残差	-13.88	-0.16	7.80	10.34	10.19	6.77	4.67
	行%	78.3%	15.0%	2.9%	2.4%	0.8%	0.3%	0.3%
	調整済み残差	13.88	0.16	-7.80	-10.34	-10.19	-6.77	-4.67
$\chi^2_{(6)} = 381.971, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.187$								
(ウェイトバック後)								
被職質経験あり群	行%	61.2%	15.8%	7.3%	7.3%	4.8%	2.6%	まったく悪くない
	調整済み残差	-15.61	-0.50	7.75	10.83	10.96	8.51	4.46
	行%	75.1%	16.1%	3.9%	2.8%	1.2%	0.6%	0.3%
	調整済み残差	15.61	0.50	-7.75	-10.83	-10.96	-8.51	-4.46
ナイフを持ち歩くこと								
(ウェイトバック前)								
被職質経験あり群 (n = 5,483)	行%	34.5%	23.3%	18.5%	15.4%	4.5%	2.2%	まったく悪くない
	調整済み残差	2.86	-6.55	-1.94	-0.29	7.50	5.41	3.55
	行%	31.9%	28.8%	19.9%	15.6%	2.0%	0.9%	0.9%
	調整済み残差	-2.86	6.55	1.94	0.29	-7.50	-5.41	-3.55
$\chi^2_{(6)} = 135.963, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.111$								
(ウェイトバック後)								
被職質経験あり群	行%	32.3%	22.6%	18.4%	16.5%	5.7%	2.8%	まったく悪くない
	調整済み残差	1.50	-5.52	-2.13	-0.44	8.51	5.24	2.14
	行%	31.0%	27.1%	20.0%	16.8%	2.5%	1.3%	1.2%
	調整済み残差	-1.50	5.52	2.13	0.44	-8.51	-5.24	-2.14

表35 群ごとの逸脱行為の悪質性評価 (つづき)

公共のもの（自動販売機・公衆電話・公園の植物など）、自宅以外の建物のかべや窓を、わざとこわしたり、傷つけたり、燃やしたりすること（らくがきを含む）							
（ウェイトバック前）	とても悪い	悪い	どちらかと いえば悪い	どちらとも いえない	どちらかと いえば悪くない	悪くない	まったく 悪くない
被職質経験あり群（n=5,483）	57.0%	27.0%	8.4%	4.9%	1.3%	0.6%	0.9%
調整済み残差	-7.12	-2.23	8.06	8.35	4.67	3.69	4.33
被職質経験なし群（n=5,483）	63.6%	28.9%	4.6%	2.0%	0.5%	0.1%	0.3%
調整済み残差	7.12	2.23	-8.06	-8.35	-4.67	-3.69	-4.33
$\chi^2_{(6)}=205.726$, p<0.001, Cramer's V=0.137							
（ウェイトバック後）	とても悪い	悪い	どちらかと いえば悪い	どちらとも いえない	どちらかと いえば悪くない	悪くない	まったく 悪くない
被職質経験あり群	54.0%	26.9%	10.1%	5.9%	1.7%	0.8%	0.8%
調整済み残差	-8.58	-2.31	8.78	9.22	4.80	4.12	3.69
被職質経験なし群	62.0%	28.8%	5.6%	2.4%	0.7%	0.2%	0.3%
調整済み残差	8.58	2.31	-8.78	-9.22	-4.80	-4.12	-3.69
店から、こっそり商品を持ち出すこと							
（ウェイトバック前）	とても悪い	悪い	どちらかと いえば悪い	どちらとも いえない	どちらかと いえば悪くない	悪くない	まったく 悪くない
被職質経験あり群（n=5,483）	62.5%	20.1%	6.8%	5.4%	2.8%	1.2%	1.1%
調整済み残差	-10.58	-1.67	8.96	7.89	9.67	6.13	4.83
被職質経験なし群（n=5,483）	72.0%	21.4%	3.1%	2.5%	0.5%	0.2%	0.3%
調整済み残差	10.58	1.67	-8.96	-7.89	-9.67	-6.13	-4.83
$\chi^2_{(6)}=327.472$, p<0.001, Cramer's V=0.173							
（ウェイトバック後）	とても悪い	悪い	どちらかと いえば悪い	どちらとも いえない	どちらかと いえば悪くない	悪くない	まったく 悪くない
被職質経験あり群	57.6%	21.1%	8.9%	6.4%	3.4%	1.5%	1.1%
調整済み残差	-12.22	-1.77	9.59	8.60	10.63	6.17	3.94
被職質経験なし群	68.8%	22.5%	4.4%	2.9%	0.6%	0.4%	0.4%
調整済み残差	12.22	1.77	-9.59	-8.60	-10.63	-6.17	-3.94

表35 群ごとの逸脱行為の悪質性評価 (つづき)

集団で自動車・バイク・スクーターに乗って、道路であぶないことをすること								
(ウェイトバック前)		とても悪い	悪い	どちらかといえは悪い	どちらともいえない	どちらかといえは悪くない	悪くない	まったく悪くない
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	48.9%	29.2%	10.6%	6.4%	2.9%	1.0%	1.0%
	調整済み残差	-6.15	-5.46	6.39	8.96	8.51	6.21	3.95
被職質経験なし群 (n=5,483)	行%	54.8%	34.1%	7.1%	2.8%	0.7%	0.1%	0.4%
	調整済み残差	6.15	5.46	-6.39	-8.96	-8.51	-6.21	-3.95
$\chi^2_{(6)}=277.435, p<0.001, \text{Cramer's } V=0.159$								
(ウェイトバック後)		とても悪い	悪い	どちらかといえは悪い	どちらともいえない	どちらかといえは悪くない	悪くない	まったく悪くない
被職質経験あり群	行%	46.3%	27.7%	12.5%	7.5%	3.7%	1.3%	1.0%
	調整済み残差	-7.37	-6.75	7.71	9.84	9.49	6.87	2.35
被職質経験なし群	行%	53.3%	33.6%	8.0%	3.3%	1.0%	0.2%	0.6%
	調整済み残差	7.37	6.75	-7.71	-9.84	-9.49	-6.87	-2.35
家族以外の人に乱暴なことをしたり、「乱暴なことをするぞ」とおどかしたりすること								
(ウェイトバック前)		とても悪い	悪い	どちらかといえは悪い	どちらともいえない	どちらかといえは悪くない	悪くない	まったく悪くない
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	53.0%	28.1%	9.0%	6.1%	2.2%	0.6%	1.0%
	調整済み残差	-7.94	-1.79	5.23	9.39	7.57	2.72	4.88
被職質経験なし群 (n=5,483)	行%	60.5%	29.6%	6.4%	2.5%	0.5%	0.2%	0.3%
	調整済み残差	7.94	1.79	-5.23	-9.39	-7.57	-2.72	-4.88
$\chi^2_{(6)}=226.828, p<0.001, \text{Cramer's } V=0.144$								
(ウェイトバック後)		とても悪い	悪い	どちらかといえは悪い	どちらともいえない	どちらかといえは悪くない	悪くない	まったく悪くない
被職質経験あり群	行%	49.9%	28.3%	10.3%	6.9%	2.9%	0.9%	0.9%
	調整済み残差	-9.57	-1.11	5.17	9.31	9.37	3.12	3.89
被職質経験なし群	行%	59.0%	29.2%	7.5%	3.0%	0.6%	0.4%	0.3%
	調整済み残差	9.57	1.11	-5.17	-9.31	-9.37	-3.12	-3.89

表36 群ごとの逸脱行為の悪質性評価の平均値

(ウェイトバック前)	度数	平均値	標準偏差	t 値
バスや電車で、キセルや無賃乗車すること	5483	5.73	1.514	-19.177 ***
	5483	6.20	0.967	
かっぺに入っていない場合や建物に入ること	5483	5.67	1.318	-14.691 ***
	5483	6.00	0.955	
家族以外の人の持ち物や乗り物（自動車・バイク・自転車など）を、わざとこわしたり、傷つけたり、燃やしたりすること（らくがきを含む）	5483	6.32	1.064	-13.782 ***
	5483	6.56	0.781	
広場などの公共の場所で、集団でさわぐこと	5483	5.65	1.214	-3.751 ***
	5483	5.73	1.013	
他人の自動車・バイク・スクーターの部品を持つていくこと	5483	6.24	1.215	-16.892 ***
	5483	6.58	0.816	
他人の自転車、かっぺに乗り回したり、持つていたりすること	5483	6.20	1.228	-16.654 ***
	5483	6.53	0.824	
人をだまして、お金やものをとること	5483	6.25	1.327	-19.101 ***
	5483	6.65	0.824	
ナイフを持ち歩くこと	5483	5.55	1.454	-4.664 ***
	5483	5.67	1.258	
公共のもの（自動販売機・公衆電話・公園の植木など）、自宅以外の建物のかべや窓、わざとこわしたり、傷つけたり、燃やしたりすること（らくがきを含む）	5483	6.28	1.094	-12.928 ***
	5483	6.52	0.789	
店から、こっそり商品を持ち出すこと	5483	6.26	1.251	-16.912 ***
	5483	6.60	0.805	
集団で自動車・バイク・スクーターに乗って、道路であふないことをすること	5483	6.08	1.234	-14.509 ***
	5483	6.37	0.880	
家族以外の人に乱暴なことをしたり、「乱暴なことをするぞ」とおどかしたりすること	5483	6.18	1.175	-14.096 ***
	5483	6.45	0.847	

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

注) いずれの項目も等分散性の仮定が成り立たなかったため、Welch の検定によっている。

9-3. 繁華街に出かける行動

Q42では、回答者のライフスタイルのなかでも、職務質問を経験することにつながりやすいと考えられる繁華街への外出頻度を問うている（より厳密に言えば、特に仕事ではない理由で繁華街に行く頻度を尋ねている）。その回答分布は表37の通りである。また、繁華街への外出頻度が、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」とで異なっているかどうかをみるために、クロス集計を行い、独立性の検定を行ったが、その結果は表38の通りであった。「被職質経験あり群」では、「被職質経験なし群」に比べて、繁華街に外出する頻度が高い。

表37 繁華街への外出頻度

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
ほぼ毎日	1.8	(198)	2.1
週に3～5日	4.5	(492)	5.6
週に1～2日	12.6	(1,377)	14.6
月に2～3日	12.0	(1,313)	13.2
月に1日	12.5	(1,366)	12.7
ほとんど出かけない	56.7	(6,220)	51.7
合計	100.0	(10,966)	100.0

表38 群ごとの繁華街への外出頻度

(ウェイトバック前)		ほぼ毎日	週に3～5日	週に1～2日	月に2～3日	月に1日	ほとんど出かけない
被職質経験あり群 (n = 5,483)	行%	2.7%	7.3%	17.6%	13.5%	13.1%	45.9%
	調整済み残差	7.17	14.02	15.94	4.85	1.97	-22.94
被職質経験なし群 (n = 5,483)	行%	0.9%	1.7%	7.5%	10.5%	11.8%	67.6%
	調整済み残差	-7.17	-14.02	-15.94	-4.85	-1.97	22.94
$\chi^2_{(3)} = 712.215, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.255$							
(ウェイトバック後)		ほぼ毎日	週に3～5日	週に1～2日	月に2～3日	月に1日	ほとんど出かけない
被職質経験あり群	行%	3.3%	9.2%	20.3%	14.3%	13.0%	39.9%
	調整済み残差	8.64	16.15	16.82	3.19	0.98	-24.66
被職質経験なし群	行%	0.9%	2.1%	8.9%	12.2%	12.4%	63.5%
	調整済み残差	-8.64	-16.15	-16.82	-3.19	-0.98	24.66

9-4. 精神的健康度、監視者の認識、低い自己認識

Q43では、精神的健康度に関して尋ねている。⁽⁴³⁾すなわち、「この1ヶ月の間にどれくらいの頻度で、以下のことがありましたか」として、「いらいらする」、「絶望的な感じになる」、「そわそわして、落ち着かない」、「気持ちがめいて、何をしても気が晴れない」、「何をするのもおっくうな気持ちになる」、「自分がなんの価値もない人間のような気持ちになる」の6項目について、その頻度を「いつも」、「たいてい」、「ときどき」、「少しだけ」、「全くない」の5件法で尋ねている。

これは、次に続くQ44と同様に、本研究プロジェクトの学術的背景の1つである（岡邊ほか 2024：295-297）、「法執行機関との接触がその後の生活や行動に対して与えるインパクトに着目する犯罪社会学的」関心から、「警察官による市民との接触が市民のその後の行動等にどのような影響を及ぼすのか」を明らかにするための質問である。したがって、第二波調査の結果とあわせることで（より）意味をもつ質問である。

その結果は、表39のとおりである。

表39 精神的健康度

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
いらいらする			
いつも	5.4	(590)	5.7
たいてい	13.1	(1,434)	14.2
ときどき	37.0	(4,055)	36.1
少しだけ	29.7	(3,255)	28.8
全くない	14.9	(1,632)	15.2
合計	100.0	(10,966)	100.0

(43) これは「K 6」とよばれる、精神的健康度のスクリーニングを目的として開発された心理尺度である（末木 2020：39）。米国のケスラーらが開発した尺度であり（Kessler et al. 2002）、日本においても十分な信頼性・妥当性が確認されている（Furukawa et al. 2008）。

警察官による市民接触行動の規定要因とインパクトに関する縦断的研究

表39 精神的健康度（つづき）

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
絶望的な感じになる			
いつも	5.9	(642)	6.1
たいてい	9.3	(1,024)	10.1
ときどき	22.7	(2,491)	24.3
少しだけ	24.0	(2,637)	24.3
全くない	38.0	(4,172)	35.2
合計	100.0	(10,966)	100.0
そわそわして、落ち着かない			
いつも	3.1	(337)	3.5
たいてい	7.5	(818)	8.6
ときどき	22.9	(2,507)	24.5
少しだけ	28.7	(3,144)	28.2
全くない	37.9	(4,160)	35.4
合計	100.0	(10,966)	100.0
気持ちがめいって、何をしても気が晴れない			
いつも	6.4	(697)	6.6
たいてい	10.5	(1,153)	11.6
ときどき	22.4	(2,461)	23.3
少しだけ	27.4	(3,005)	26.7
全くない	33.3	(3,650)	31.9
合計	100.0	(10,966)	100.0
何をするのもおっくうな気持ちになる			
いつも	6.8	(749)	7.0
たいてい	11.4	(1,254)	12.5
ときどき	24.5	(2,683)	24.9
少しだけ	29.7	(3,254)	28.2
全くない	27.6	(3,026)	27.4
合計	100.0	(10,966)	100.0
自分がなんの価値もない人間のような気持ちになる			
いつも	8.8	(962)	9.7
たいてい	10.9	(1,190)	12.3
ときどき	19.1	(2,099)	20.0
少しだけ	21.0	(2,302)	20.9
全くない	40.2	(4,413)	37.2
合計	100.0	(10,966)	100.0

ここで、この精神的健康度が、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」とで異なっているかどうかをみるために、クロス集計を行い、独立性の検定を行った（表40）。

おしなべて、「被職質経験あり群」の健康度が「被職質経験なし群」と比べて悪いことがわかるが、なぜそうなのかはこの段階ではなんともいえないだろう。

Q44では、前半部分で、監視されている（ような）気がするか、警察官を意識しているかについて尋ねている。すなわち、「まわりから見られている気がする」、「監視カメラが気になる」、「警察官が気になる」、「警察官の姿をみると緊張する」、「外出するときは目だたないように気をつける」の5項目について、自身についてどの程度あてはまるかを「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの4件法で尋ねている。

これは、抑止理論にしたがって、そうした認識が犯罪への威嚇・抑止効果を伴うものかどうかを測るものである。

その結果は、表41のとおりである。

ここで、この監視者の認識が、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」とで異なっているかどうかをみるために、クロス集計を行い、独立性の検定を行った（表42）。

「被職質経験なし群」と比べて「被職質経験あり群」のほうが、監視者を意識する程度が高いことがわかる。おそらくは「被職質経験」がこのことに影響しているものと思われるが、この段階でははっきりしたことはいえないだろう。

Q44の後半部分は、低い自己認識について尋ねるもので、「まわりの人から仲間はずれにされているように感じる」、「生きづらさを感じる」、「まわりの人はわたしのことを、こころよく思っていない」、「まわりの人はわたしのことを、うさんくさいと思っている」、「自分はダメな人間（甲南法学'25） 65-1・2・3・4-154（154）

表40 群ごとの精神的健康度

いらいする						
(ウェイトバック前)						
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	6.2%	16.0%	38.0%	26.1%	13.8%
	調整済み残差	3.72	8.95	2.16	-8.13	-3.33
	行%	4.6%	10.2%	36.0%	33.2%	16.0%
	調整済み残差	-3.72	-8.95	-2.16	8.13	3.33
$\chi^2_{(4)} = 141.600, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.114$						
(ウェイトバック後)						
被職質経験あり群	行%	6.4%	17.4%	36.9%	25.2%	14.0%
	調整済み残差	3.30	9.68	1.67	-8.22	-3.40
	行%	5.0%	11.0%	35.3%	32.4%	16.4%
	調整済み残差	-3.30	-9.68	-1.67	8.22	3.40
絶望的な感じになる						
(ウェイトバック前)						
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	6.5%	11.3%	28.0%	24.7%	31.4%
	調整済み残差	2.85	6.96	8.32	1.72	-14.24
	行%	5.2%	7.4%	19.4%	23.3%	44.6%
	調整済み残差	-2.85	-6.96	-8.32	-1.72	14.24
$\chi^2_{(4)} = 232.895, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.146$						
(ウェイトバック後)						
被職質経験あり群	行%	6.6%	11.7%	27.8%	25.2%	28.6%
	調整済み残差	2.08	5.57	8.76	2.25	-14.45
	行%	5.6%	8.5%	20.7%	23.4%	41.8%
	調整済み残差	-2.08	-5.57	-8.76	-2.25	14.45

表40 群ごとの精神的健康度 (つづき)

それぞれ、落ち着かない (ウェイトバック前)							
被職質経験あり群 (n=5,483)							
行%	3.6%	9.2%	26.5%	少しだけ	全くない		
調整済み残差	3.26	6.91	8.98	-0.84	-11.89		
被職質経験なし群 (n=5,483)							
行%	2.5%	5.7%	19.3%	29.0%	43.4%		
調整済み残差	-3.26	-6.91	-8.98	0.84	11.89		
$\chi^2_{(4)}=204.902, p<0.001, \text{Cramer's } V=0.137$							
(ウェイトバック後)							
被職質経験あり群							
行%	3.9%	10.5%	27.9%	27.7%	30.0%		
調整済み残差	2.77	7.17	8.36	-1.20	-11.64		
被職質経験なし群							
行%	3.0%	6.6%	21.0%	28.7%	40.7%		
調整済み残差	-2.77	-7.17	-8.36	1.20	11.64		
気持ちがめいって、何をしても気が晴れない							
(ウェイトバック前)							
被職質経験あり群 (n=5,483)							
行%	6.9%	13.0%	25.2%	27.4%	27.4%		
調整済み残差	2.54	8.56	6.94	0.11	-13.13		
被職質経験なし群 (n=5,483)							
行%	5.8%	8.0%	19.7%	27.4%	39.2%		
調整済み残差	-2.54	-8.56	-6.94	-0.11	13.13		
$\chi^2_{(4)}=224.008, p<0.001, \text{Cramer's } V=0.143$							
(ウェイトバック後)							
被職質経験あり群							
行%	7.2%	14.1%	26.0%	26.7%	25.9%		
調整済み残差	2.69	8.29	6.68	0.15	-13.33		
被職質経験なし群							
行%	6.0%	9.0%	20.6%	26.6%	37.8%		
調整済み残差	-2.69	-8.29	-6.68	-0.15	13.33		

表40 群ごとの精神的健康度 (つづき)

何をするのもおっくうな気持ちになる						
(ウェイトバック前)						
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	7.2%	14.0%	26.9%	少しだけ	全くない
	調整済み残差	1.55	8.28	5.98	-2.17	-10.30
被職質経験なし群 (n=5,483)	行%	6.5%	8.9%	22.0%	30.6%	32.0%
	調整済み残差	-1.55	-8.28	-5.98	2.17	10.30
$\chi^2_{(4)} = 170.061, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.125$						
(ウェイトバック後)						
被職質経験あり群	行%	7.4%	14.9%	27.5%	少しだけ	全くない
	調整済み残差	1.73	7.51	6.16	-2.16	-10.36
被職質経験なし群	行%	6.5%	10.1%	22.4%	29.1%	31.8%
	調整済み残差	-1.73	-7.51	-6.16	2.16	10.36
自分がなんの価値もない人間のような気持ちになる						
(ウェイトバック前)						
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	10.4%	13.6%	21.4%	少しだけ	全くない
	調整済み残差	5.87	9.09	6.14	0.09	-14.16
被職質経験なし群 (n=5,483)	行%	7.2%	8.2%	16.8%	21.0%	46.9%
	調整済み残差	-5.87	-9.09	-6.14	-0.09	14.16
$\chi^2_{(4)} = 255.367, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.153$						
(ウェイトバック後)						
被職質経験あり群	行%	11.6%	15.5%	22.0%	少しだけ	全くない
	調整済み残差	6.90	10.10	5.20	-0.90	-14.60
被職質経験なし群	行%	7.7%	9.2%	18.0%	21.2%	43.9%
	調整済み残差	-6.88	-10.13	-5.20	0.94	14.61

研究ノート

表41 監視者の認識

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
まわりから見はられている気がする			
とてもあてはまる	3.1	(339)	3.7
ある程度あてはまる	16.7	(1,832)	18.2
あまりあてはまらない	38.2	(4,187)	37.8
まったくあてはまらない	42.0	(4,608)	40.3
合計	100.0	(10,966)	100.0
監視カメラが気になる			
とてもあてはまる	2.9	(313)	3.2
ある程度あてはまる	13.9	(1,522)	15.0
あまりあてはまらない	37.9	(4,152)	37.5
まったくあてはまらない	45.4	(4,979)	44.4
合計	100.0	(10,966)	100.0
警察官が気になる			
とてもあてはまる	3.8	(419)	4.3
ある程度あてはまる	17.8	(1,957)	19.1
あまりあてはまらない	38.4	(4,214)	37.9
まったくあてはまらない	39.9	(4,376)	38.8
合計	100.0	(10,966)	100.0
警察官の姿をみると緊張する			
とてもあてはまる	3.7	(405)	4.5
ある程度あてはまる	21.2	(2,322)	22.8
あまりあてはまらない	35.3	(3,873)	34.9
まったくあてはまらない	39.8	(4,366)	37.8
合計	100.0	(10,966)	100.0
外出するときは目だたないように気をつける			
とてもあてはまる	4.8	(529)	6.2
ある程度あてはまる	20.8	(2,284)	22.1
あまりあてはまらない	38.3	(4,195)	37.3
まったくあてはまらない	36.1	(3,958)	34.4
合計	100.0	(10,966)	100.0

警察官による市民接触行動の規定要因とインパクトに関する縦断的研究

表42 群ごとの監視者の認識

まわりから見はられている気がする					
(ウェイトバック前)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	4.4%	20.4%	38.1%	37.0%
	調整済み残差	8.11	10.50	-0.18	-10.60
被職質経験なし群 (n=5,483)	行%	1.8%	13.0%	38.3%	47.0%
	調整済み残差	-8.11	-10.50	0.18	10.60
$\chi^2_{(3)} = 220.690, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.142$					
(ウェイトバック後)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群	行%	5.1%	22.0%	37.8%	35.1%
	調整済み残差	8.07	10.34	-0.10	-11.14
被職質経験なし群	行%	2.2%	14.4%	37.9%	45.5%
	調整済み残差	-8.07	-10.34	0.10	11.14
監視カメラが気になる					
(ウェイトバック前)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	4.1%	17.8%	38.2%	39.9%
	調整済み残差	7.86	11.82	0.75	-11.57
被職質経験なし群 (n=5,483)	行%	1.6%	10.0%	37.5%	50.9%
	調整済み残差	-7.86	-11.82	-0.75	11.57
$\chi^2_{(3)} = 253.699, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.152$					
(ウェイトバック後)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群	行%	4.3%	19.4%	37.7%	38.5%
	調整済み残差	7.06	12.93	0.51	-12.27
被職質経験なし群	行%	2.0%	10.6%	37.3%	50.2%
	調整済み残差	-7.06	-12.93	-0.51	12.27
警察官が気になる					
(ウェイトバック前)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	5.8%	22.2%	38.0%	34.1%
	調整済み残差	10.61	11.80	-0.94	-12.44
被職質経験なし群 (n=5,483)	行%	1.9%	13.5%	38.9%	45.7%
	調整済み残差	-10.61	-11.80	0.94	12.44
$\chi^2_{(3)} = 316.166, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.170$					
(ウェイトバック後)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群	行%	6.2%	23.4%	37.4%	32.9%
	調整済み残差	10.11	11.60	-1.02	-12.54
被職質経験なし群	行%	2.3%	14.7%	38.4%	44.6%
	調整済み残差	-10.11	-11.60	1.02	12.54

研究ノート

表42 群ごとの監視者の認識（つづき）

警察官の姿をみると緊張する					
(ウェイトバック前)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群 (n=5, 483)	行%	5.0%	24.1%	35.6%	35.3%
	調整済み残差	7.44	7.43	0.62	-9.68
被職質経験なし群 (n=5, 483)	行%	2.4%	18.3%	35.0%	44.3%
	調整済み残差	-7.44	-7.43	-0.62	9.68
$\chi^2_{(3)} = 153.502, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.118$					
(ウェイトバック後)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群	行%	5.9%	25.5%	35.5%	33.1%
	調整済み残差	7.07	6.82	1.16	-10.05
被職質経験なし群	行%	3.1%	20.1%	34.4%	42.5%
	調整済み残差	-7.07	-6.82	-1.16	10.05
外出するときは目だたないように気をつける					
(ウェイトバック前)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群 (n=5, 483)	行%	6.6%	22.9%	37.9%	32.7%
	調整済み残差	8.69	5.22	-0.84	-7.44
被職質経験なし群 (n=5, 483)	行%	3.0%	18.8%	38.6%	39.5%
	調整済み残差	-8.69	-5.22	0.84	7.44
$\chi^2_{(3)} = 129.240, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.109$					
(ウェイトバック後)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群	行%	8.2%	24.1%	36.7%	31.0%
	調整済み残差	8.70	5.22	-1.37	-7.59
被職質経験なし群	行%	4.2%	20.0%	37.9%	37.9%
	調整済み残差	-8.70	-5.22	1.37	7.59

だと思う」、「自分はいかがわしいやつだと思う」の6項目について、自身についてどの程度あてはまるかを「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの4件法で尋ねている。

これは、ラベリング論に基づくもので、前半部分と同様に、「被職質経験」によってこれがどのように変化するかを（第2段階調査の結果と比較することで）みるためのものである。

その結果は、表43のとおりである。

ここで、この低い自己認識が、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」とで異なっているかどうかをみるために、クロス集計を行い、（甲南法学'25）65-1・2・3・4-160（160）

警察官による市民接触行動の規定要因とインパクトに関する縦断的研究

表43 低い自己認識

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
まわりの人から仲間はずれにされているように感じる			
とてもあてはまる	5.1	(564)	6.3
ある程度あてはまる	14.7	(1,614)	16.4
あまりあてはまらない	37.9	(4,157)	37.1
まったくあてはまらない	42.2	(4,631)	40.3
合計	100.0	(10,966)	100.0
生きづらさを感じる			
とてもあてはまる	10.5	(1,150)	11.3
ある程度あてはまる	25.5	(2,794)	25.7
あまりあてはまらない	32.8	(3,592)	32.7
まったくあてはまらない	31.3	(3,430)	30.4
合計	100.0	(10,966)	100.0
まわり的人是わたしのことを、ころよく思っていない			
とてもあてはまる	5.5	(608)	6.5
ある程度あてはまる	17.8	(1,949)	19.6
あまりあてはまらない	43.1	(4,722)	41.3
まったくあてはまらない	33.6	(3,687)	32.6
合計	100.0	(10,966)	100.0
まわり的人是わたしのことを、うさんくさいと思っている			
とてもあてはまる	5.0	(544)	5.9
ある程度あてはまる	15.9	(1,741)	17.1
あまりあてはまらない	41.4	(4,538)	39.8
まったくあてはまらない	37.8	(4,143)	37.1
合計	100.0	(10,966)	100.0
自分はダメな人間だと思う			
とてもあてはまる	11.0	(1,205)	11.9
ある程度あてはまる	24.6	(2,700)	25.6
あまりあてはまらない	34.0	(3,723)	33.1
まったくあてはまらない	30.4	(3,338)	29.5
合計	100.0	(10,966)	100.0
自分はいかがわしいやつだと思う			
とてもあてはまる	4.5	(489)	5.1
ある程度あてはまる	14.5	(1,595)	16.1
あまりあてはまらない	40.3	(4,414)	40.1
まったくあてはまらない	40.7	(4,468)	38.7
合計	100.0	(10,966)	100.0

独立性の検定を行った（表44）。

「被職質経験なし群」と比べて「被職質経験あり群」のほうが、自己認識が低いことがわかる。「被職質経験」がこのことに影響しているのかもしれないが、この段階でははっきりしたことはいえないだろう。

警察官による市民接触行動の規定要因とインパクトに関する縦断的研究

表44 群ごとの低い自己認識

まわりの人から仲間はずれにされているように感じる					
(ウェイトバック前)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	7.1%	19.0%	36.8%	37.1%
	調整済み残差	9.34	12.61	-2.38	-10.88
被職質経験なし群 (n=5,483)	行%	3.2%	10.5%	39.0%	47.4%
	調整済み残差	-9.34	-12.61	2.38	10.88
$\chi^2_{(3)} = 290.393, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.163$					
(ウェイトバック後)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群	行%	8.8%	20.9%	35.4%	34.9%
	調整済み残差	10.81	12.93	-3.71	-11.44
被職質経験なし群	行%	3.8%	11.8%	38.8%	45.6%
	調整済み残差	-10.81	-12.93	3.71	11.44
生きづらさを感じる					
(ウェイトバック前)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	12.4%	27.9%	32.1%	27.6%
	調整済み残差	6.48	5.83	-1.46	-8.28
被職質経験なし群 (n=5,483)	行%	8.6%	23.1%	33.4%	34.9%
	調整済み残差	-6.48	-5.83	1.46	8.28
$\chi^2_{(3)} = 111.503, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.101$					
(ウェイトバック後)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群	行%	13.1%	27.9%	32.1%	26.9%
	調整済み残差	6.16	5.25	-1.38	-7.82
被職質経験なし群	行%	9.4%	23.5%	33.3%	33.8%
	調整済み残差	-6.16	-5.25	1.38	7.82
まわりの人はわたしのことを、ころよく思っていない					
(ウェイトバック前)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	7.4%	21.6%	41.7%	29.3%
	調整済み残差	8.35	10.42	-2.82	-9.52
被職質経験なし群 (n=5,483)	行%	3.7%	14.0%	44.4%	37.9%
	調整済み残差	-8.35	-10.42	2.82	9.52
$\chi^2_{(3)} = 219.692, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.142$					
(ウェイトバック後)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群	行%	8.6%	23.5%	39.6%	28.3%
	調整済み残差	8.99	10.40	-3.72	-9.63
被職質経験なし群	行%	4.4%	15.6%	43.1%	36.9%
	調整済み残差	-8.99	-10.40	3.72	9.63

研究ノート

表44 群ごとの低い自己認識（つづき）

まわりの人はわたしのことを、うさんくさいと思っている					
(ウェイトバック前)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	6.7%	19.8%	40.5%	33.0%
	調整済み残差	8.53	11.21	-1.82	-10.42
被職質経験なし群 (n=5,483)	行%	3.2%	12.0%	42.2%	42.6%
	調整済み残差	-8.53	-11.21	1.82	10.42
$\chi^2_{(3)} = 244.386, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.149$					
(ウェイトバック後)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群	行%	8.1%	21.2%	38.3%	32.3%
	調整済み残差	9.90	11.41	-3.23	-10.45
被職質経験なし群	行%	3.7%	13.0%	41.4%	42.0%
	調整済み残差	-9.90	-11.41	3.23	10.45
自分はダメな人間だと思う					
(ウェイトバック前)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	11.6%	26.2%	34.5%	27.6%
	調整済み残差	2.17	3.95	1.27	-6.47
被職質経験なし群 (n=5,483)	行%	10.3%	23.0%	33.4%	33.3%
	調整済み残差	-2.17	-3.95	-1.27	6.47
$\chi^2_{(3)} = 46.147, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.065$					
(ウェイトバック後)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群	行%	12.1%	27.5%	33.6%	26.7%
	調整済み残差	0.68	4.74	1.29	-6.36
被職質経験なし群	行%	11.7%	23.6%	32.5%	32.2%
	調整済み残差	-0.68	-4.74	-1.29	6.36
自分はいかかわしいやつだと思う					
(ウェイトバック前)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	5.8%	18.4%	39.7%	36.1%
	調整済み残差	6.99	11.35	-1.13	-9.95
被職質経験なし群 (n=5,483)	行%	3.1%	10.7%	40.8%	45.4%
	調整済み残差	-6.99	-11.35	1.13	9.95
$\chi^2_{(3)} = 216.131, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.140$					
(ウェイトバック後)		とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
被職質経験あり群	行%	6.7%	20.4%	38.9%	34.0%
	調整済み残差	7.41	12.34	-2.49	-10.15
被職質経験なし群	行%	3.6%	11.8%	41.2%	43.5%
	調整済み残差	-7.41	-12.34	2.49	10.15

9-5. 現在の生活状況について

Q45では、現在の生活状況について尋ねている。⁽⁴⁴⁾すなわち、「現在のあなたの暮らし向きについて」、「大変ゆとりがある」、「ややゆとりがある」、「ふつう」、「やや苦しい」、「大変苦しい」の5件法で尋ねている。

これは、本研究プロジェクトの学術的背景となっている（岡邊ほか2024：295-297）、「社会経済的属性の格差が法執行機関の行動に与える影響に関する刑事法社会学的背景」と、Q43のところで述べた「法執行機関との接触がその後の生活や行動に対して与えるインパクトに着目する犯罪社会学的」関心に基づく質問である。すなわち、ラベリング論に準拠していえば、前者は選択的法執行（警察官による市民との接触がどのような要因によって規定されているか？）、後者は二次的逸脱（警察官による市民との接触が市民のその後の行動等にどのような影響を及ぼすのか？）に関係するものである。それゆえ、後者については第2波調査の結果をまたねばならない。

その結果は、表45のとおりである。

(44) Q45は、「2022年生活と支え合いに関する調査」を参考にしている。

表45 現在の暮らし向き

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
現在のあなたの暮らし向きについて			
大変ゆとりがある	3.8	(415)	4.1
ややゆとりがある	20.1	(2,208)	21.1
ふつう	42.0	(4,603)	41.7
やや苦しい	21.3	(2,332)	21.3
大変苦しい	12.8	(1,408)	11.8
合計	100.0	(10,966)	100.0

参考までに、「2022年生活と支え合いに関する調査」の同種の質問の結果と比べてみるならば、その対象は異なるものの（参考とする調査の対象は18歳以上の世帯員であり女性も含まれる、また、無回答も集計している）、分布の傾向は似通っている⁽⁴⁵⁾。

ここで、この現在の暮らし向きが、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」とで異なっているかどうかをみるために、クロス集計を行い、独立性の検定を行った（表46）。

(45) 「2022年生活と支え合いに関する調査」の同種の質問の結果は、順に4.1%、15.7%、55.8%、17.3%、5.0%である（無回答2.0%）。

表46 群ごとの現在の暮らし向き

(ウェイトバック前)		大変ゆとりがある	ややゆとりがある	ふつう	やや苦しい	大変苦しい
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	4.4%	21.5%	41.4%	20.0%	12.7%
	調整済み残差	3.15	3.62	-1.22	-3.31	-0.29
	行%	3.2%	18.7%	42.5%	22.6%	12.9%
	調整済み残差	-3.15	-3.62	1.22	3.31	0.29
$\chi^2_{(4)} = 29.608, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.052$						
(ウェイトバック後)		大変ゆとりがある	ややゆとりがある	ふつう	やや苦しい	大変苦しい
被職質経験あり群	行%	5.0%	23.5%	40.7%	19.1%	11.7%
	調整済み残差	4.71	6.08	-2.16	-5.47	-0.36
	行%	3.2%	18.7%	42.7%	23.4%	11.9%
	調整済み残差	-4.71	-6.08	2.16	5.47	0.36

研究ノート

本結果からは、「被職質経験なし群」と比べて「被職質経験あり群」のほうが、やや暮らし向きがいいことがわかる。

Q46⁽⁴⁶⁾では、自身が所属する社会階層について、次のような仕方で尋ねている。すなわち、「かりに現在の日本の社会全体を、次のような10段階の層に分けるとすれば、あなた自身はこのどれに入りますか」。一番上が「1」で、一番下が「10」である。

所属階層（階層帰属意識）は短期的に変化するものではないから、ラベリング論に準拠していえば、二次的逸脱ではなく、選択的法執行に係する質問である。

その結果は、表47のとおりである。

参考までに、「JGSS2018」の同種の質問の結果と比べてみるならば（JGSS2018においては本調査の対象と同じ男性20～60代のデータが入手可能であるため（ただし無回答も集計している）その結果と比較した）、分布の傾向は似通っている⁽⁴⁷⁾。

表47 所属する社会階層

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
1	0.8	(89)	0.9
2	1.7	(187)	1.9
3	6.6	(720)	6.4
4	12.4	(1,363)	12.6
5	27.5	(3,013)	26.8
6	14.3	(1,566)	15.1
7	13.5	(1,479)	13.7
8	11.8	(1,297)	11.6
9	5.9	(647)	5.9
10	5.5	(605)	5.0
合計	100.0	(10,966)	100.0

(46) Q46は、「JGSS」を参考に行っている。

(47) 「JGSS2018」の同種の結果は、順に1.2%、1.3%、6.7%、10.9%、41.0%、13.1%、12.4%、7.9%、2.3%、2.1%である（無回答0.9%）。

ここで、この所属する社会階層が、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」とで異なっているかどうかをみるために、クロス集計を行い、独立性の検定を行った（表48）。

表48 群ごとの所属する社会階層

(ウェイトバック前)										
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	1.1%	2.5%	7.1%	12.7%	25.6%	13.9%	12.6%	11.9%	6.6%
	調整済み残差	3.73	6.56	2.47	0.84	-4.30	-1.09	-2.77	0.33	3.20
被職質経験なし群 (n=5,483)	行%	0.5%	0.9%	6.0%	12.2%	29.3%	14.6%	14.4%	11.7%	5.2%
	調整済み残差	-3.73	-6.56	-2.47	-0.84	4.30	1.09	2.77	-0.33	-3.20
$\chi^2_{(9)} = 95.025, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.093$										
(ウェイトバック後)										
被職質経験あり群	行%	1.2%	2.8%	7.0%	13.2%	24.7%	14.7%	12.7%	11.6%	6.9%
	調整済み残差	3.50	7.07	2.54	1.87	-5.13	-1.15	-3.06	0.00	4.24
被職質経験なし群	行%	0.6%	0.9%	5.8%	12.0%	29.0%	15.5%	14.7%	11.6%	5.0%
	調整済み残差	-3.50	-7.07	-2.54	-1.87	5.13	1.15	3.06	0.00	-4.24

上位層で「被職質経験あり群」の割合がそれなりに高く、中位層では「被職質経験なし群」の割合が高くなり、下位層では再び「被職質経験あり群」の割合が高くなることがわかる。

Q47では、生活面での満足度について尋ねている。すなわち、「住んでいる地域」、「余暇の過ごし方」、「家庭生活」、「現在の家計の状態」、「友人関係」、「健康状態」、「配偶者（夫や妻）との関係⁽⁴⁹⁾」の7項目について、「あなたはどのくらい満足していますか」として、「非常に満足している」から「非常に不満」までの5件法で尋ねている。

Q47と次に続くQ48も、本研究プロジェクトの学術的背景の1つである（岡邊ほか 2024：295-297）、「法執行機関との接触がその後の生活や行動に対して与えるインパクトに着目する犯罪社会学的」関心に基づく質問である。すなわち、警察官との接触が市民のその後の生活にネガティブな影響を及ぼすかをみるものである。それゆえ、第二波調査の結果とあわせることで（より）意味をもつ質問である。

その結果は、表49のとおりである。

(48) Q47は、「JGSS」を参考にしている。

(49) 本項目については、配偶者なし（n = 5068（46.2%））を欠損値として処理している。

研究ノート

表49 生活面での満足度

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
住んでいる地域			
非常に満足	11.1	(1213)	11.4
満足	49.8	(5460)	48.0
どちらともいえない	28.1	(3082)	28.0
不満	7.7	(848)	8.6
非常に不満	3.3	(363)	3.9
合計	100.0	(10,966)	100.0
余暇の過ごし方			
非常に満足	6.6	(726)	7.5
満足	41.1	(4507)	40.0
どちらともいえない	36.0	(3953)	35.1
不満	12.6	(1382)	13.3
非常に不満	3.6	(398)	4.0
合計	100.0	(10,966)	100.0
家庭生活			
非常に満足	9.0	(992)	10.0
満足	38.5	(4227)	37.2
どちらともいえない	34.5	(3784)	34.6
不満	12.7	(1396)	13.0
非常に不満	5.2	(567)	5.2
合計	100.0	(10,966)	100.0
現在の家計の状態			
非常に満足	4.1	(447)	4.5
満足	24.6	(2695)	23.9
どちらともいえない	34.4	(3776)	35.1
不満	24.2	(2655)	24.5
非常に不満	12.7	(1393)	12.0
合計	100.0	(10,966)	100.0
友人関係			
非常に満足	6.2	(676)	7.7
満足	31.5	(3452)	31.6
どちらともいえない	47.6	(5220)	44.9
不満	11.1	(1222)	12.0
非常に不満	3.6	(396)	3.8
合計	100.0	(10,966)	100.0

表49 生活面での満足度（つづき）

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
健康状態			
非常に満足	6.0	(653)	7.5
満足	31.8	(3484)	33.2
どちらともいえない	37.5	(4109)	36.4
不満	18.7	(2047)	17.2
非常に不満	6.1	(673)	5.8
合計	100.0	(10,966)	100.0
配偶者（夫や妻）との関係			
非常に満足	8.9	(977)	7.8
満足	23.0	(2526)	19.0
どちらともいえない	14.6	(1599)	12.1
不満	4.9	(542)	4.2
非常に不満	2.3	(254)	1.9
合計	53.8	(5,898)	45.0

ここで、この生活面での満足度が、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」とで異なっているかどうかをみるために、クロス集計を行い、独立性の検定を行った（表50）。

本結果からは、「被職質経験なし群」と比べて「被職質経験あり群」のほうが、生活面での満足度が低いことが分かる。ただし、「現在の家計の状態」については差異は見出せなかった。

⁽⁵⁰⁾ Q48では、生活全般の満足度を尋ねている。すなわち、「現在の生活全般にどのくらい満足していますか」として、「非常に満足」から「非常に不満」までの5件法で尋ねている。

(50) Q48は、「JGSS」を参考にしている。

表50 群ごとの生活面での満足度

住んでいる地域						
(ウェイトバック前)						
被職質経験あり群 (n = 5,483)	行%	10.7%	45.9%	29.3%	9.8%	4.3%
	調整済み残差	-1.31	-8.25	2.89	8.08	6.03
	行%	11.5%	53.7%	26.9%	5.7%	2.3%
	調整済み残差	1.31	8.25	-2.89	-8.08	-6.03
$\chi^2_{(4)} = 137.113, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.112$						
(ウェイトバック後)						
被職質経験あり群	行%	10.4%	43.6%	29.2%	11.4%	5.5%
	調整済み残差	-3.45	-9.38	2.74	10.35	8.52
	行%	12.5%	52.5%	26.8%	5.8%	2.3%
	調整済み残差	3.45	9.38	-2.74	-10.35	-8.52
余暇の過ごし方						
(ウェイトバック前)						
被職質経験あり群 (n = 5,483)	行%	6.4%	38.2%	36.3%	14.7%	4.4%
	調整済み残差	-0.84	-6.15	0.66	6.50	4.08
	行%	6.8%	44.0%	35.7%	10.5%	2.9%
	調整済み残差	0.84	6.15	-0.66	-6.50	-4.08
$\chi^2_{(4)} = 76.277, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.083$						
(ウェイトバック後)						
被職質経験あり群	行%	7.0%	36.7%	35.3%	15.9%	5.1%
	調整済み残差	-1.92	-7.05	0.45	7.81	5.54
	行%	8.0%	43.3%	34.9%	10.8%	3.0%
	調整済み残差	1.92	7.05	-0.45	-7.81	-5.54

表50 群ごとの生活面での満足度 (つづき)

家庭生活						
(ウェイトバック前)						
被職質経験あり群 (n = 5,483)	行%	非常に満足	満足	どちらともいえない	不満	非常に不満
		8.2%	35.3%	35.4%	15.0%	6.1%
	調整済み残差	-3.00	-6.97	1.89	7.05	4.53
	行%	9.9%	41.8%	33.6%	10.5%	4.2%
被職質経験なし群 (n = 5,483)	調整済み残差	3.00	6.97	-1.89	-7.05	-4.53
$\chi^2_{(4)} = 103.109, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.097$						
(ウェイトバック後)						
被職質経験あり群	行%	非常に満足	満足	どちらともいえない	不満	非常に不満
		8.8%	34.2%	35.0%	15.8%	6.3%
	調整済み残差	-4.33	-6.53	0.89	8.67	5.02
	行%	11.2%	40.2%	34.2%	10.2%	4.2%
被職質経験なし群	調整済み残差	4.33	6.53	-0.89	-8.67	-5.02
現在の家計の状態						
(ウェイトバック前)						
被職質経験あり群 (n = 5,483)	行%	非常に満足	満足	どちらともいえない	不満	非常に不満
		4.4%	23.6%	34.3%	24.6%	13.1%
	調整済み残差	1.69	-2.28	-0.32	0.91	1.23
	行%	3.8%	25.5%	34.6%	23.8%	12.3%
被職質経験なし群 (n = 5,483)	調整済み残差	-1.69	2.28	0.32	-0.91	-1.23
$\chi^2_{(4)} = 8.705, n.s.$						
(ウェイトバック後)						
被職質経験あり群	行%	非常に満足	満足	どちらともいえない	不満	非常に不満
		4.9%	23.4%	34.6%	24.8%	12.4%
	調整済み残差	1.65	-1.28	-1.13	0.70	1.35
	行%	4.2%	24.4%	35.6%	24.2%	11.5%
被職質経験なし群	調整済み残差	-1.65	1.28	1.13	-0.70	-1.35

表50 群ごとの生活面での満足度 (つづき)

友人関係						
(ウェイトバック前)		非常に満足	満足	どちらともいえない	不満	非常に不満
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	6.3%	30.1%	46.0%	13.4%	4.3%
	調整済み残差	0.48	-3.17	-3.33	7.40	3.69
	行%	6.1%	32.9%	49.2%	8.9%	3.0%
	調整済み残差	-0.48	3.17	3.33	-7.40	-3.69
$\chi^2_{(4)} = 74.694, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.083$						
(ウェイトバック後)		非常に満足	満足	どちらともいえない	不満	非常に不満
被職質経験あり群	行%	7.5%	30.2%	43.0%	14.8%	4.6%
	調整済み残差	-0.75	-3.07	-4.14	8.78	4.36
	行%	7.9%	33.0%	46.9%	9.3%	3.0%
	調整済み残差	0.75	3.07	4.14	-8.78	-4.36
健康状態						
(ウェイトバック前)		非常に満足	満足	どちらともいえない	不満	非常に不満
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	5.9%	30.1%	37.2%	20.3%	6.6%
	調整済み残差	-0.36	-3.81	-0.69	4.44	1.95
	行%	6.0%	33.5%	37.8%	17.0%	5.7%
	調整済み残差	0.36	3.81	0.69	-4.44	-1.95
$\chi^2_{(4)} = 29.924, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.052$						
(ウェイトバック後)		非常に満足	満足	どちらともいえない	不満	非常に不満
被職質経験あり群	行%	7.3%	31.2%	36.1%	19.1%	6.2%
	調整済み残差	-0.44	-4.38	-0.65	5.26	2.17
	行%	7.6%	35.1%	36.7%	15.3%	5.3%
	調整済み残差	0.44	4.38	0.65	-5.26	-2.17

表50 群ごとの生活面での満足度 (つづき)

配偶者 (夫や妻) との関係		非常に満足	満足	どちらともいえない	不満	非常に不満
(ウェイトバック前)	被職質経験あり群 (n=2,893)					
	行%	15.6%	40.1%	29.1%	10.6%	4.6%
	調整済み残差	-1.98	-4.21	3.38	3.71	1.21
	行%	17.5%	45.5%	25.2%	7.8%	4.0%
(ウェイトバック後)	被職質経験なし群 (n=3,005)					
	行%	1.98	4.21	-3.38	-3.71	-1.21
	調整済み残差					
$\chi^2_{(4)} = 35.626, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.078$						
(ウェイトバック後)	被職質経験あり群	非常に満足	満足	どちらともいえない	不満	非常に不満
	行%	16.6%	38.5%	29.3%	11.1%	4.5%
	調整済み残差	-1.37	-5.24	3.84	4.19	0.91
	行%	18.0%	45.9%	24.4%	7.6%	4.0%
被職質経験なし群	調整済み残差	1.37	5.24	-3.84	-4.19	-0.91

研究ノート

その結果は、表51のとおりである。

参考までに、「JGSS2018」の同種の質問の結果と比べてみるならば（JGSS2018においては本調査の対象と同じ男性20～60代のデータが入手可能であるため（ただし無回答も集計している）その結果と比較した）、分布の傾向は似通っている⁽⁵¹⁾。

ここで、この生活全般の満足度が、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」とで異なっているかどうかをみるために、クロス集計を行い、独立性の検定を行った（表52）。

表51 生活全般の満足度

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
非常に満足	4.7	(518)	5.1
満足	38.6	(4234)	38.6
どちらともいえない	32.8	(3599)	33.1
不満	16.5	(1811)	16.4
非常に不満	7.3	(804)	6.9
合計	100.0	(10,966)	100.0

(51) 「JGSS2018」の同種の結果は、順に11.1%、38.6%、37.4%、10.9%、1.7%である（無回答0.3%）。

表52 群ごとの生活全般の満足度

(ウェイトバック前)		非常に満足	満足	どちらともいえない	不満	非常に不満
被職質経験あり群 (n=5,483)	行 %	4.7%	35.5%	33.7%	17.8%	8.4%
	調整済み残差	-0.36	-6.67	1.97	3.52	4.18
	行 %	4.8%	41.7%	31.9%	15.3%	6.3%
	調整済み残差	0.36	6.67	-1.97	-3.52	-4.18
$\chi^2_{(4)} = 56.569, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.072$						
(ウェイトバック後)		非常に満足	満足	どちらともいえない	不満	非常に不満
被職質経験あり群	行 %	4.9%	35.7%	33.9%	17.7%	7.8%
	調整済み残差	-0.57	-6.16	1.72	3.77	3.62
被職質経験なし群	行 %	5.2%	41.4%	32.3%	15.0%	6.0%
	調整済み残差	0.57	6.16	-1.72	-3.77	-3.62

本結果からは、「被職質経験なし群」と比べて「被職質経験あり群」のほうが、一貫して生活全般の満足度が低いことがわかる。

9-6. 逸脱行動の経験の有無について

Q50では、ここ最近の逸脱行動の経験の有無について尋ねている。すなわち、「広場などの公共の場所で、集団でさわぐ」、「歩きたばこをする」、「ごみのポイ捨てをする」、「初対面の人とけんかになりそうになる」、「してはならない場所に自動車を駐停車する」、「スピード違反や信号無視のような交通違反をする」の6項目について、最近1年間にどの程度（0回、1回、2回、3回以上）行ったかを尋ねている。⁽⁵²⁾

これは、法執行機関との接触の有無によって、こうした行動がそれ以降増えるのか／減るのかをみるためのもので、理論的な関心としては、ラベリング論、抑止理論が関係する。それゆえ、第二波調査の結果とあわせることで（より）意味をもつ質問である。

その結果は、表53のとおりである。

(52) 本来であれば、犯罪行為の有無を尋ねたいところであったが、調査実施上の制約から断念した（9-2を参照）。

警察官による市民接触行動の規定要因とインパクトに関する縦断的研究

表53 逸脱行動の経験

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
広場などの公共の場所で、集団でさわぐ			
0 回	89.6	(9824)	86.3
1 回	5.3	(581)	6.7
2 回	3.5	(380)	4.7
3 回以上	1.7	(181)	2.3
合計	100.0	(10,966)	100.0
歩きたばこをする			
0 回	80.9	(8870)	80.5
1 回	5.4	(592)	5.9
2 回	4.0	(436)	5.0
3 回以上	9.7	(1068)	8.6
合計	100.0	(10,966)	100.0
ごみのポイ捨てをする			
0 回	83.7	(9179)	82.6
1 回	7.3	(806)	7.6
2 回	3.7	(408)	4.7
3 回以上	5.2	(573)	5.1
合計	100.0	(10,966)	100.0
初対面の人とけんかになりそうになる			
0 回	88.5	(9702)	86.7
1 回	7.0	(764)	7.9
2 回	3.0	(329)	3.8
3 回以上	1.6	(171)	1.7
合計	100.0	(10,966)	100.0
してはならない場所に自動車を駐停車する			
0 回	83.7	(9182)	83.0
1 回	8.0	(879)	8.7
2 回	3.5	(383)	3.8
3 回以上	4.8	(522)	4.4
合計	100.0	(10,966)	100.0
スピード違反や信号無視のような交通違反をする			
0 回	80.7	(8853)	80.8
1 回	9.4	(1034)	9.8
2 回	2.9	(317)	3.3
3 回以上	6.9	(762)	6.1
合計	100.0	(10,966)	100.0

研究ノート

すべての項目において、10～20%の対象者にこれらの逸脱行動の経験があることがわかる。タバコのポイ捨てや、交通違反のような習慣的な逸脱行動については、3回以上と回答した者の割合が他の逸脱行動と比べて相対的に高い。

ここで、この逸脱行動の経験度が、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」とで異なっているかどうかをみるために、クロス集計を行い、独立性の検定を行った（表54）。

警察官による市民接触行動の規定要因とインパクトに関する縦断的研究

表54 群ごとの逸脱行動の経験

広場などの公共の場所で、集団でさわぐ (ウェイトバック前)		0 回	1 回	2 回	3 回以上
被職質経験あり群 (n = 5, 483)	行%	82.3%	8.9%	6.3%	2.5%
	調整済み残差	-25.0	16.9	16.1	7.1
被職質経験なし群 (n = 5, 483)	行%	96.9%	1.7%	0.7%	0.8%
	調整済み残差	25.0	-16.9	-16.1	-7.1
$\chi^2_{(3)} = 635.923, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.241$					
(ウェイトバック後)		0 回	1 回	2 回	3 回以上
被職質経験あり群	行%	77.1%	11.0%	8.4%	3.4%
	調整済み残差	-28.06	18.03	18.62	8.03
被職質経験なし群	行%	95.5%	2.4%	0.9%	1.1%
	調整済み残差	28.06	-18.03	-18.62	-8.03
歩きタバコをする (ウェイトバック前)		0 回	1 回	2 回	3 回以上
被職質経験あり群 (n = 5, 483)	行%	73.4%	8.5%	6.8%	11.3%
	調整済み残差	-19.9	14.5	15.2	5.3
被職質経験なし群 (n = 5, 483)	行%	88.4%	2.3%	1.1%	8.2%
	調整済み残差	19.9	-14.5	-15.2	-5.3
$\chi^2_{(3)} = 522.448, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.218$					
(ウェイトバック後)		0 回	1 回	2 回	3 回以上
被職質経験あり群	行%	71.3%	9.4%	8.9%	10.3%
	調整済み残差	-24.09	15.92	18.76	6.09
被職質経験なし群	行%	89.6%	2.3%	1.1%	7.0%
	調整済み残差	24.09	-15.92	-18.76	-6.09
ごみのポイ捨てをする (ウェイトバック前)		0 回	1 回	2 回	3 回以上
被職質経験あり群 (n = 5, 483)	行%	75.9%	11.3%	6.4%	6.4%
	調整済み残差	-22.2	15.9	14.6	5.7
被職質経験なし群 (n = 5, 483)	行%	91.5%	3.4%	1.1%	4.0%
	調整済み残差	22.2	-15.9	-14.6	-5.7
$\chi^2_{(3)} = 550.705, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.224$					
(ウェイトバック後)		0 回	1 回	2 回	3 回以上
被職質経験あり群	行%	73.2%	12.1%	8.2%	6.4%
	調整済み残差	-25.75	17.82	17.59	6.01
被職質経験なし群	行%	91.9%	3.1%	1.1%	3.9%
	調整済み残差	25.75	-17.82	-17.59	-6.01

研究ノート

表54 群ごとの逸脱行動の経験（つづき）

初対面の人とけんかになりそうになる					
(ウェイトバック前)		0 回	1 回	2 回	3 回以上
被職質経験あり群 (n = 5, 483)	行%	81.7%	10.8%	5.2%	2.3%
	調整済み残差	-22.2	15.8	13.4	6.6
被職質経験なし群 (n = 5, 483)	行%	95.3%	3.1%	0.8%	0.8%
	調整済み残差	22.2	-15.8	-13.4	-6.6
$\chi^2_{(3)} = 503.815, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.214$					
(ウェイトバック後)		0 回	1 回	2 回	3 回以上
被職質経験あり群	行%	78.4%	12.3%	6.6%	2.6%
	調整済み残差	-25.41	17.51	15.63	7.34
被職質経験なし群	行%	94.9%	3.4%	0.9%	0.8%
	調整済み残差	25.41	-17.51	-15.63	-7.34
してはならない場所に自動車を駐停車する					
(ウェイトバック前)		0 回	1 回	2 回	3 回以上
被職質経験あり群 (n = 5, 483)	行%	76.6%	12.2%	5.4%	5.7%
	調整済み残差	-20.2	16.3	11.1	4.7
被職質経験なし群 (n = 5, 483)	行%	90.8%	3.8%	1.6%	3.8%
	調整済み残差	20.2	-16.3	-11.1	-4.7
$\chi^2_{(3)} = 449.316, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.202$					
(ウェイトバック後)		0 回	1 回	2 回	3 回以上
被職質経験あり群	行%	74.5%	13.9%	6.3%	5.3%
	調整済み残差	-23.73	19.20	13.21	4.64
被職質経験なし群	行%	91.5%	3.5%	1.4%	3.5%
	調整済み残差	23.73	-19.20	-13.21	-4.64
スピード違反や信号無視のような交通違反をする					
(ウェイトバック前)		0 回	1 回	2 回	3 回以上
被職質経験あり群 (n = 5, 483)	行%	75.3%	13.5%	4.3%	7.0%
	調整済み残差	-14.4	14.4	8.6	0.1
被職質経験なし群 (n = 5, 483)	行%	86.2%	5.4%	1.5%	6.9%
	調整済み残差	14.4	-14.4	-8.6	-0.1
$\chi^2_{(3)} = 300.862, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.166$					
(ウェイトバック後)		0 回	1 回	2 回	3 回以上
被職質経験あり群	行%	74.3%	14.8%	5.0%	5.9%
	調整済み残差	-17.33	17.48	10.03	-0.68
被職質経験なし群	行%	87.3%	4.9%	1.6%	6.3%
	調整済み残差	17.33	-17.48	-10.03	0.68

本結果からは、「被職質経験なし群」と比べて「被職質経験あり群」のほうが、すべての項目において、かなりの差を示しつつ逸脱行動の経験があること、またその頻度も高いことがわかる。

10. まとめ（逸脱行動に対する評価やライフスタイル）

以上までに、逸脱行動に対する評価やライフスタイルに関わる諸質問について、第一波第2段階調査で得られた回答結果について紹介してきた。さしあたり、以下の諸点を指摘することができよう。

- ・各種犯罪行為の逮捕可能性は、「被職質経験なし群」よりも「被職質経験あり群」において低く見積もられている（Q40）。
- ・各逸脱行為の悪質性は、「被職質経験なし群」よりも「被職質経験あり群」において低く捉えられている（Q41）。
- ・「被職質経験あり群」は「被職質経験なし群」と比較して、繁華街に外出する頻度高い（Q42）。
- ・精神的健康度については、「被職質経験なし群」と比べて「被職質経験あり群」のほうが、おしなべて健康度が悪い（Q43）。
- ・抑止理論に関係するであろう監視者の認識については、「被職質経験なし群」と比べて「被職質経験あり群」のほうが、監視者を意識する程度が高い（Q44前半）。
- ・ラベリング論に関係するであろう低い自己認識については、「被職質経験なし群」と比べて「被職質経験あり群」のほうが、自己認識が低い（Q44後半）。
- ・現在の暮らし向き（生活状況）については、「被職質経験なし群」と比べて「被職質経験あり群」のほうが、やや暮らし向きがよい（Q45）。
- ・所属する社会階層については、上位層で「被職質経験あり群」の割

合がそれなりに高く、中位層では「被職質経験なし群」の割合が高くなり、下位層では再び「被職質経験あり群」の割合が高くなる（Q46）。

- ・生活面での満足度については、「被職質経験なし群」と比べて「被職質経験あり群」のほうが、生活面での満足度が低い。ただし、「現在の家計の状態」については差異は見い出せなかった（Q47）。
- ・生活全般の満足度については、「被職質経験なし群」と比べて「被職質経験あり群」のほうが、一貫して生活全般の満足度が低い（Q48）。
- ・逸脱行動の経験については、すべての項目で、10～20%の対象者にこれらの逸脱行動の経験があり、「被職質経験なし群」と比べて「被職質経験あり群」のほうが、すべての項目において、かなりの差を示しつつ逸脱行動の経験があり、その頻度も高い（Q50）。

11. 第一波第2段階調査の基礎的分析（属性等）

Q51からQ56はデモグラフィック要因である。これらの属性によって、「法執行機関との接触（職質経験）」に差があるかをみるための項目である。⁽⁵³⁾

Q51は学歴である。⁽⁵⁴⁾

その結果は、表55のとおりである。

ここで、この学歴が、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」とで異なっているかどうかをみるために、クロス集計を行い、独立性の検定を行った（表56）。

(53) なお、第二波調査ではこれらの項目は尋ねていないので、本研究では、「法執行機関との接触」がこれらの要因に影響を及ぼすかについては検討しない。

(54) 本質問では、無回答を欠損値（n = 60（0.5%））として処理している。

警察官による市民接触行動の規定要因とインパクトに関する縦断的研究

表55 学歴

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
中学校	1.9	(203)	1.8
高校	21.5	(2355)	19.7
専門学校	11.2	(1229)	10.8
高専・短大	2.9	(320)	2.8
大学・大学院	62.0	(6799)	64.4
合計	99.5	(10,906)	99.3

表56 群ごとの学歴

(ウェイトバック前)		中学校	高校	専門学校	高専・短大	大学・大学院
被職質経験あり群 (n=5,483)	行 %	2.2%	22.7%	11.4%	3.5%	60.3%
	調整済み残差	2.23	2.81	0.36	3.22	-4.36
	行 %	1.6%	20.5%	11.2%	2.4%	64.4%
	調整済み残差	-2.23	-2.81	-0.36	-3.22	4.36
$\chi^2_{(4)} = 28.415, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.051$						
(ウェイトバック後)		中学校	高校	専門学校	高専・短大	大学・大学院
被職質経験あり群	行 %	2.0%	20.5%	10.8%	3.5%	63.2%
	調整済み残差	1.85	1.90	-0.16	4.43	-3.52
被職質経験なし群	行 %	1.6%	19.1%	10.9%	2.1%	66.4%
	調整済み残差	-1.85	-1.90	0.16	-4.43	3.52

Q52は現在の職業である。

その結果は、表57のとおりである。

ここで、この職業が、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」とで異なっているかどうかをみるために、クロス集計を行い、独立性の検定を行った（表58）。

表57 職業

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
経営者、役員	3.8	(421)	3.2
常時雇用されている一般従業者	59.0	(6475)	60.1
パート・アルバイト	6.6	(724)	7.1
派遣社員	2.2	(236)	2.2
契約社員、嘱託	5.0	(553)	4.2
臨時雇用	0.2	(26)	0.2
自営業種、自由業者	9.2	(1005)	7.2
家族従業者	0.5	(54)	0.5
内職	0.3	(35)	0.4
無職（仕事を探している）	3.2	(351)	3.4
無職（仕事を探していない）	7.4	(813)	5.9
学生	1.6	(175)	4.6
わからない	0.9	(98)	1.0
合計	99.5	(10,906)	99.3

表58 群ごとの職業

(ウェイトバック前)	常時雇用 されている一般 従業員													
	経営者、 役員	パート・ アルバイト	派遣 社員	契約 社員、 嘱託	臨時雇用	自営業種、 自由業者	家族 従業員	内職	無職（仕 事を探し ている）	無職（仕 事を探し ていない）	学生 わからない			
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	4.6%	57.3%	7.1%	2.8%	5.3%	0.4%	8.9%	0.5%	0.4%	3.3%	6.4%	1.8%	1.2%
	調整済み残差	4.03	-3.67	1.92	4.74	1.35	3.53	-1.03	0.27	2.20	0.60	-4.05	1.45	3.45
	行%	3.1%	60.8%	6.1%	1.5%	4.8%	0.1%	9.4%	0.5%	0.2%	3.1%	8.4%	1.4%	0.6%
	調整済み残差	-4.03	3.67	-1.92	-4.74	-1.35	-3.53	1.03	-0.27	-2.20	-0.60	4.05	-1.45	-3.45
$\chi^2_{(12)} = 95.937, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.094$														
(ウェイトバック後)	常時雇用 されている一般 従業員													
	経営者、 役員	パート・ アルバイト	派遣 社員	契約 社員、 嘱託	臨時雇用	自営業種、 自由業者	家族 従業員	内職	無職（仕 事を探し ている）	無職（仕 事を探し ていない）	学生 わからない			
被職質経験あり群	行%	4.1%	58.7%	7.4%	2.7%	4.4%	0.4%	6.8%	0.5%	0.6%	3.1%	4.9%	5.0%	1.3%
	調整済み残差	5.34	-2.98	1.07	3.74	1.14	3.28	-1.63	0.13	3.21	-1.53	-4.66	2.38	4.10
	行%	2.3%	61.5%	6.9%	1.6%	4.0%	0.1%	7.6%	0.5%	0.2%	3.6%	7.0%	4.1%	0.6%
	調整済み残差	-5.34	2.98	-1.07	-3.74	-1.14	-3.28	1.63	-0.13	-3.21	1.53	4.66	-2.38	-4.10
被職質経験なし群	行%													
	調整済み残差													
	行%													
	調整済み残差													

Q53は、勤め先の組織規模について尋ねるもので、勤め先の会社全体の従業員数を尋ねている。⁽⁵⁵⁾

その結果は、表59のとおりである。

ここで、この勤め先の従業員数が、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」とで異なっているかどうかをみるために、クロス集計を行い、独立性の検定を行った（表60）。

表59 勤め先の従業員数

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
1 人	6.3	(693)	5.0
2～4 人	4.4	(481)	3.6
5～9 人	4.1	(450)	3.9
10～29人	7.3	(796)	7.3
30～99人	11.2	(1226)	10.8
100～299人	10.8	(1179)	10.5
300～499人	4.7	(513)	4.6
500～999人	5.8	(633)	6.0
1000人以上	24.1	(2642)	24.3
官公庁	3.5	(386)	3.5
わからない	4.5	(495)	5.3
合計	86.6	(9,494)	84.8

(55) 派遣社員の場合は、派遣元の企業規模を回答してもらっている。また、勤務先が官公庁の場合は、「官公庁」という選択肢を選んでもらっている。なお、無回答は欠損値（n = 1472（13.4%））として処理している。

表60 群ごとの勤め先の従業員数

(ウェイトバック前)												
	1人	2～4人	5～9人	10～29人	30～99人	100～299人	300～499人	500～999人	1000人以上	官公庁 わからない		
被職質経験あり群 (n=4,764)	行%	6.8%	5.1%	5.0%	8.6%	13.5%	13.1%	5.7%	6.8%	26.6%	3.5%	5.2%
	調整済み残差	-1.95	-0.03	1.08	0.93	1.82	2.02	1.32	0.52	-2.60	-2.57	-0.04
	行%	7.8%	5.1%	4.5%	8.1%	12.3%	11.7%	5.1%	6.5%	29.0%	4.6%	5.2%
被職質経験なし群 (n=4,730)	調整済み残差	1.95	0.03	-1.08	-0.93	-1.82	-2.02	-1.32	-0.52	2.60	2.57	0.04
	$\chi^2_{(10)} = 25.006, p<0.01, \text{Cramer's } V = 0.051$											
(ウェイトバック後)												
	1人	2～4人	5～9人	10～29人	30～99人	100～299人	300～499人	500～999人	1000人以上	官公庁 わからない		
被職質経験あり群	行%	5.3%	4.3%	4.8%	9.1%	13.8%	12.9%	6.0%	7.1%	27.0%	3.8%	5.9%
	調整済み残差	-2.28	0.29	0.93	1.91	3.18	1.49	2.34	0.04	-3.48	-1.94	-1.57
	行%	6.5%	4.2%	4.4%	8.0%	11.6%	11.9%	4.9%	7.0%	30.2%	4.6%	6.7%
被職質経験なし群	調整済み残差	2.28	-0.29	-0.93	-1.91	-3.18	-1.49	-2.34	-0.04	3.48	1.94	1.57

Q54は、現在の仕事の内容について尋ねている。⁽⁵⁶⁾

その結果は、表61のとおりである。

ここで、この現在の仕事の内容が、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」とで異なっているかどうかをみるために、クロス集計を行い、独立性の検定を行った（表62）。

表61 現在の仕事の内容

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
専門職・技術職	21.7	(2376)	21.8
管理職	14.3	(1568)	11.1
事務職	15.3	(1679)	16.3
販売職	6.8	(746)	7.3
サービス職	12.4	(1365)	12.8
生産現場職・技能職	8.0	(880)	7.6
運輸・保安職	5.5	(608)	5.1
農林漁業	0.3	(33)	0.3
わからない	1.9	(212)	2.3
合計	86.3	(9,494)	84.6

(56) 無回答は欠損値（n = 1499（13.7%））として処理している。

表62 群ごとの仕事の内容

(ウェイトバック前)		専門職・ 技術職	管理職	事務職	販売職	サービス職	生産現場 職・技能職	運輸・ 保安職	農林漁業	わからない
被職質経験あり群 (n=4,758)	行%	23.0%	17.5%	17.0%	8.2%	15.5%	9.1%	6.6%	0.4%	2.8%
	調整済み残差	-4.75	2.43	-1.98	1.07	2.98	-0.52	0.71	0.84	3.40
	行%	27.2%	15.6%	18.5%	7.6%	13.3%	9.4%	6.2%	0.3%	1.7%
	調整済み残差	4.75	-2.43	1.98	-1.07	-2.98	0.52	-0.71	-0.84	-3.40
$\chi^2_{(8)} = 46.415, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.070$										
(ウェイトバック後)		専門職・ 技術職	管理職	事務職	販売職	サービス職	生産現場 職・技能職	運輸・ 保安職	農林漁業	わからない
被職質経験あり群	行%	24.0%	14.3%	18.1%	9.2%	15.8%	8.8%	6.0%	0.5%	3.4%
	調整済み残差	-4.00	3.61	-2.92	2.02	1.68	-0.68	-0.09	1.12	4.09
	行%	27.6%	11.8%	20.5%	8.0%	14.5%	9.2%	6.1%	0.3%	2.0%
	調整済み残差	4.00	-3.61	2.92	-2.02	-1.68	0.68	0.09	-1.12	-4.09

Q55は、現在の仕事においてなんらかの役職についているかを尋ねて⁽⁵⁷⁾いる。

その結果は、表63のとおりである。

ここで、この役職の有無が、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」とで異なっているかどうかをみるために、クロス集計を行い、独立性の検定を行った（表64）。

表63 役職の有無

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
役職にはついていない	50.0	(5480)	53.2
監督、職長、班長、組長	3.6	(396)	3.7
係長、係長相当職	10.2	(1123)	9.4
課長、課長相当職	9.9	(1087)	8.0
部長、部長相当職	5.8	(633)	4.5
社長、重役、役員、理事	5.1	(557)	3.8
その他	0.0	(3)	0.0
わからない	1.9	(210)	2.2
合計	86.5	(9,489)	84.8

(57) 無回答は欠損値（n = 1499（13.7%））として処理している。

表64 群ごとの役職の有無

(ウェイトバック前)		役職には ついていない	監督、職長、 班長、組長	係長、係長 相当職	課長、課長 相当職	部長、部長 相当職	社長、重役、 役員、理事	その他	わからない
被職質経験あり群 (n = 4, 758)	行%	53.4%	5.2%	12.4%	12.3%	7.6%	6.2%	0.0%	2.9%
	調整済み残差	-8.58	4.96	1.69	2.49	3.74	1.18	-0.58	4.83
	行%	62.1%	3.2%	11.3%	10.6%	5.7%	5.6%	0.0%	1.5%
	調整済み残差	8.58	-4.96	-1.69	-2.49	-3.74	-1.18	0.58	-4.83
$\chi^2_{(7)} = 100.236, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.103$									
(ウェイトバック後)		役職には ついていない	監督、職長、 班長、組長	係長、係長 相当職	課長、課長 相当職	部長、部長 相当職	社長、重役、 役員、理事	その他	わからない
被職質経験あり群	行%	57.2%	5.5%	12.0%	10.5%	6.4%	4.8%	0.0%	3.5%
	調整済み残差	-11.09	5.36	2.83	3.63	4.86	1.69	0.00	5.55
被職質経験なし群	行%	68.3%	3.2%	10.2%	8.3%	4.1%	4.1%	0.0%	1.7%
	調整済み残差	11.09	-5.36	-2.83	-3.63	-4.86	-1.69	0.00	-5.55

Q56は、年収について尋ねている。ここでの年収は、過去1年間の調査協力者のもので、税込みで、年金、株式配当等すべての収入について臨時収入、副収入も含まれる。

その結果は、表65のとおりである。

ここで、この過去1年間の年収が、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」とで異なっているかどうかをみるために、クロス集計を行い、独立性の検定を行った(表66)。

表65 過去1年間の年収

	%	(度数)	ウェイトバック後 %
1 なし	4.0	(440)	4.8
2 25万円未満	3.8	(419)	4.9
3 50万円くらい	2.8	(309)	3.6
4 100万円くらい	4.6	(508)	5.1
5 200万円くらい	7.6	(837)	7.4
6 300万円くらい	10.2	(1114)	10.9
7 400万円くらい	12.2	(1341)	13.1
8 500万円くらい	16.3	(1789)	16.7
9 700万円くらい	14.8	(1625)	12.7
10 1000万円くらい	8.4	(918)	6.6
11 1500万円くらい	2.2	(237)	1.7
12 2000万円くらい	0.5	(60)	0.5
13 2250万円以上	0.8	(93)	0.8
14 答えたくない	11.6	(1276)	11.1
合計	100.0	(10,966)	100.0

表66 群ごとの過去1年間の年収

(ウェイトバックス前)		なし	25万円 未満	50万円 くらい	100万円 くらい	200万円 くらい	300万円 くらい	400万円 くらい	500万円 くらい	700万円 くらい	1000万円 くらい	1500万円 くらい	2000万円 くらい	2250万円 以上	答えたく ない
被職質経験あり群 (n=5,483)	行%	4.3%	4.1%	3.3%	5.3%	8.3%	10.1%	11.7%	15.6%	14.9%	8.1%	2.0%	0.7%	1.2%	10.3%
	調整済み残差	1.65	1.34	3.17	3.27	2.63	-0.32	-1.60	-1.89	0.24	-1.17	-1.12	2.33	4.48	-4.23
	行%	3.7%	3.6%	2.3%	4.0%	7.0%	10.2%	12.7%	17.0%	14.7%	8.7%	2.3%	0.4%	0.5%	12.9%
被職質経験なし群 (n=5,483)	調整済み残差	-1.65	-1.34	-3.17	-3.27	-2.63	0.32	1.60	1.89	-0.24	1.17	1.12	-2.33	-4.48	4.23
$\chi^2_{(13)} = 79.665, p < 0.001, \text{Cramer's } V = 0.085$															
(ウェイトバックス後)		なし	25万円 未満	50万円 くらい	100万円 くらい	200万円 くらい	300万円 くらい	400万円 くらい	500万円 くらい	700万円 くらい	1000万円 くらい	1500万円 くらい	2000万円 くらい	2250万円 以上	答えたく ない
被職質経験あり群	行%	4.9%	4.8%	4.2%	6.0%	7.9%	11.0%	12.5%	16.1%	13.1%	6.5%	1.8%	0.6%	1.1%	9.5%
	調整済み残差	0.62	-0.27	3.80	3.93	1.81	0.09	-1.84	-1.62	1.11	-0.54	0.14	2.22	4.60	-5.50
	行%	4.6%	4.9%	2.9%	4.3%	7.0%	10.9%	13.7%	17.2%	12.4%	6.7%	1.7%	0.3%	0.4%	12.8%
被職質経験なし群	調整済み残差	-0.62	0.27	-3.80	-3.93	-1.81	-0.09	1.84	1.62	-1.11	0.54	-0.14	-2.22	-4.60	5.50

デモグラフィック要因について、特徴的なところをまとめれば、次のようになるだろう。すなわち、「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」とで比べるならば、「被職質経験なし群」のほうが、高学歴で、常勤の職に就いている割合が高く、勤務先の組織規模が大きく、また、官公庁に勤めている割合が高く、専門職・技術職、また、事務職の割合が高い。他方で、「被職質経験あり群」のほうが、何らかの役職についている割合が高く、1500万円くらい以上の高収入層の割合が高い。

12. あとがき

ここで2回にわたって連載した本稿の構成を振り返り、最後に我々自身への課題をいくつか検討して、本稿を閉じることにしたい。

繰り返しになるが、我々の研究は、職務質問を中心とする警察官による一般市民との接触について、①それがどのような要因によって規定されるかという問題と、②それが一般市民のその後の認識・状況・行動にどのようなインパクトを及ぼしているかという問題を、③一般市民の同一サンプルから2つの時点で収集したデータによって解明することを目的としている。①は選択的法執行の問題であって、警察官による一般市民との接触行動は、基本的に、接触の地域的背景や対象市民の特性によって説明されるべき従属変数として位置づけられる。②は手続的公正、威嚇効果、生活構造理論、ラベリング論など多くの理論的視点から構築された調査項目を含むものであるが、ここでは、警察官による一般市民との接触行動は、一般市民のその後の認識・状況・行動に対する独立変数の一部と位置付けられる。そして③は、警察官による一般市民との接触行動を一般市民の認識・状況・行動に対する独立変数として明確に位置付けうる分析を行うためには、両者は適切な時間的間隔を置いて測定

(58) 背景にある理論的視点と参照した先行研究は、資料のご提供をいただいた先行研究者への謝意と共に、本稿の関係箇所にて記載した。

しなければならないという方法論的要請に基づくものであって、おそらく我が国の法社会学・犯罪社会学における最初の縦断的研究と評価しうるものである。

そのために我々は、最大規模のモニター群を有するインターネット調査会社に委託して、東京23区・政令指定都市20市、その他の主要中核市22市に居住する20代から60代の男性を対象とする、二波の調査を行った。

第一波調査は、それ自体が2段階に分かれていた。

第一波第1段階調査は、2023年6月7日から11日に、警察官による接触の経験を有する者を発見するために行った。5つの接触類型を設定し、「この1年くらいの間」の接触経験を尋ねた。77,992名が回答し、12,398名が設定された5つのタイプのいずれかの経験があると回答した。この段階では、調査会社が把握しているデモグラフィック要因のデータも入手した。

第一波第2段階調査は、より広範かつ詳細な質問項目を設定して、2023年6月10日に開始し、同12日に終了した。「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」がほぼ同数回答することを目指として、結局、両者同数、合計10,966名から回答を得た。第1段階の「被職質経験あり群」で第2段階に回答した者は5,483名で、44.2%にあたった。

第二波調査は、第一波調査の回答者を対象として、2023年12月16日に開始して、同19日に終了した。目標とした回収数は6,000で、その間に、「被職質経験あり群」2,992名と「被職質経験なし群」3,201名、合計6,193の有効回答が得られた。第二波調査の項目は基本的に第一波第2段階調査と共通であるが、第一波調査後の接触経験も把握するために、「過去6ヶ月くらいの間」の接触も⁽⁵⁹⁾尋ねた。

本稿自体は第一波調査で収集されたデータの「基礎的報告」を目的と

(59) 6ヶ月間隔で56.47%が維持されたことになる。この率自体を、他の類似期間の縦断的調査と比較検討する価値があると思われる。

している。ここで「記述統計報告」ではなく「基礎的報告」と題しているのは、調査項目単体の記述統計にとどまらず、各調査項目について「被職質経験あり群」と「被職質経験なし群」の回答分布を比較検討しており、一部では異なる項目への回答の相互関係をも分析していて、記述から分析へと大きく踏み出しているからである。

ただし本稿は、データ分析を並行させながら、いわば走りながら作成した報告書であるために、前回掲載時（甲南法学第64巻第3・4号（2024年）383-421頁）に全体の構成を予め目次として示すことができなかった。そこで下記に本稿の構成を振り返り、本稿の詳細を検討していただく一助にしたいと思う。以下において、「1. はじめに」～「11. 第一波第2段階調査の基礎的分析（属性等）」とあるのは、各部の担当者による番号とタイトルである。

[前回]

1. はじめに
2. 研究プロジェクトの背景とねらい
3. 調査の手続き
 - 3-1. 調査手続きの概要
 - 3-2. 第一波調査
 - 3-3. 第二波調査
4. 第一波第1段階調査の基礎的分析
 - 4-1. 第一波第1段階調査の概要
 - 4-2. 狭義の被職質経験
 - 4-3. 広義の被職質経験

(60) 記述統計は、「警察官による市民接触行動の規定要因とインパクトに関する縦断的研究 第一波第2段階調査 基礎集計表」(<http://hdl.handle.net/2433/289140>)として公表されている。

5. 第一波第2段階調査の基礎的分析（職質時の状況・職質の印象や受けとめ）
 - 5-1. 第一波第2段階調査の回収状況
 - 5-2. 職質でもっとも印象に残っているできごと
 - 5-3. 職質を受けた時の状況
 - 5-4. 職質を受けた理由について抱いた印象
 - 5-5. 職質を受けた時に警察官に対して感じたこと
6. まとめ

[今回]

7. 第一波第2段階調査の基礎的分析（警察に対する態度⁽⁶¹⁾）
 - 7-1. 警察の公正への信頼
 - 7-2. 警察の命令に従う義務
 - 7-3. 警察による道徳的価値観の共有
 - 7-4. 警察の不公正さの認識
 - 7-5. 警察に対する総合評価

(61) 7および9、11のクロス表分析は、他の部分におけるクロス表分析に比べて、表示される統計量が増えている。すなわち、通常の χ^2 乗値とp値に加えて、残差とCramer's Vが表記されている。残差分析は、 χ^2 乗値が有意である場合に、クロス表のどのセルの値がとくに寄与しているのかを判断するのに使われるもので、1.96以上の値にとくに注目するのが一般的である。田中（2006：54）を参照。それに対してCramer's Vは、サンプル数が多くなれば χ^2 乗値が容易に有意になりうることから、有意性の数値を示すだけでは不十分であって、効果の大きさを示す数値も表示すべきではないか、という視点から表示される数値のひとつである。これは、0～1の値を取るものであって、0.10以上を小さな効果、0.30以上を中程度の効果、0.50以上を大きな効果と評価するのが一般的である。水本・竹内（2008：51）を参照。クロス表分析に限らず、他の手法による分析でも同様であるが、今後は、共通の分析手法を用いた場合の表記法の統一に留意したいと思う。

- 7-6. 警察への協力行動意図
8. まとめ（警察に対する態度）
9. 第一波第2段階調査の基礎的分析（逸脱行動に対する評価やライフスタイル）
 - 9-1. 逮捕の可能性
 - 9-2. 逸脱行動の悪質性評価
 - 9-3. 繁華街に出かける行動
 - 9-4. 精神的健康度、監視者の認識、低い自己認識
 - 9-5. 現在の生活状況について
 - 9-6. 逸脱行動の経験の有無について
10. まとめ（逸脱行動に対する評価やライフスタイル）
11. 第一波第2段階調査の基礎的分析（属性等）

ここで我々としては、第二波調査のデータ分析にただちに進む前に、第一波第2段階調査のデータを十分に生かした分析を行うべきであろう。第一波第2段階調査では、従属変数である「接触経験」の類型・頻度・態様・印象などが過去に向かって想起的に尋ねられているので、その規定要因としての可能性を検討しうるのは、デモグラフィック要因や地域的特性など、不変あるいは安定性が高い要因に限定される。しかし、その点は第二波調査でも同様なのであって、第一波調査での分析結果は第二波調査の分析に向けた仮説を提供しうると思われる。

それに対して、「接触経験」以外の種々の認識は調査時点のものを尋ねているので、時間的に先行する「接触経験」を独立変数に位置づけた分析は、概念的には可能であると思われる。その結果は、時間的前後関係が明瞭な第二波調査のデータに対して、やはり有力な仮説を提供するであろう。

〔文献〕

- Furukawa, T. A., Kawakami, N., Saitoh, M., Ono, Y., Nakane, Y., Nakamura, Y., Tachimori, H., Iwata, N., Uda, H., Nakane, H., Watanabe, M., Naganuma, Y., Hata, Y., Kobayashi, M., Miyake, Y., Takashima, T., Kikkawa, T. (2008). The performance of the Japanese version of the K6 and K10 in the World Mental Health Survey Japan. *International Journal of Methods in Psychiatric Research*, 17(3), 152–158.
- 浜井浩一・津島昌寛 (2012) 「社会調査（世論調査）の理論と仕組み——『Trust in Justice』の調査結果から——」季刊刑事弁護70号132–137頁。
- ISRD-JAPAN 実行委員会編 (2024) 『日本の青少年の行動と意識』現代人文社。
- Kessler, R. C., Andrews, G., Colpe, L. J., Hiripi, E., Mroczek, D. K., Normand, S.-L. T., Walters, E. E., & Zaslavsky, A. M. (2002). Short screening scales to monitor population prevalences and trends in non-specific psychological distress. *Psychological Medicine*, 32(6), 959–976.
- 宮下萌編著 (2023) 『レイシャル・プロファイリング』大月書店。
- 水本篤・竹内理 (2011) 「効果量と検定力分析入門——統計的検定を正しく使うために——」外国語教育メディア学会関西支部メソドロジー研究部会編 (2011) 『報告論集第1号』47–73頁。(https://www.mizumot.com/method/mizumoto-takeuchi.pdf. 2024年9月1日アクセス。)
- 岡邊健 (2013) 『現代日本の少年非行』現代人文社。
- 岡邊健・佐伯昌彦・松原英世・宮澤節生 (2024) 「警察官による市民接行動の規定要因とインパクトに関する縦断的研究——第一波調査の基礎的報告(1)——」甲南法学64巻3–4号383–421頁。
- 佐藤舞 (2013) 「警察に対する信頼と正統性——ヨーロッパ社会調査ラウンドファイブからみたイギリスにおける現状——」矯正講座33号13–25頁。
- 末木新 (2020) 「日本語版 K6 の結果のレビューと和光大学新入生への調査の結果——心理的な困難を抱えた学生が支援につながる確率が向上する環境作りを目指して——」和光大学学生相談センター年報2号38–46頁。
- 田中敏 (2006) 『実践心理データ解析 改訂版』新曜社。
- 津島昌寛・浜井浩一 (2011) 「犯罪被害などに関する調査」中央調査報650号 (https://www.crs.or.jp/backno/No650/6501.htm を参照。2024年4月18日アクセス)。
- 津島昌寛・浜井浩一 (2013) 「警察に対する信頼と協力——日本における『手続きの公正 (Procedural Justice)』理論の検証——」矯正講座33号27–40頁。
- Tsushima, M., & Hamai, K. (2015). Public cooperation with the police in Japan: Testing the legitimacy model. *Journal of Contemporary Criminal Justice*, 31(2), (甲南法学'25) 65–1・2・3・4–204 (204)

警察官による市民接触行動の規定要因とインパクトに関する縦断的研究

212-228.

津島昌寛・浜井浩一（2017）「手続き的公正——信頼される刑事司法とは？——」浜井浩一編『犯罪をどう防ぐか』岩波書店、323-342頁。

Tyler, T. R. (2006). *Why people obey the law*, Princeton University Press.